

イメージの世界都市

講演——by 吉本隆明



Theme of the 2nd part
MR.TAMBOURINE MAN by Bob Dylan
Hey! Mr.Tambourine Man, play a song for me,
I'm not sleepy and there is no place I'm going to,
Hey! Mr.Tambourine Man, play a song for me,
In the jingle jangle morning I'll come followin' you.

It has come the fascinating time to introduce you Japanese Foucault, Ryumei Yoshimoto. I heard recently that he made his debut in French magazine L'Express, and I also ascertained it. Here comes the citation: Yoshimoto sans larmes. Il fait une rentree avec fleur et couronnes. Mais, qu'elle plaise ou irrite, son oeuvre vit assez pour resister aux honneurs posthumes. Woh, what a ecrivain! OK. We applause his coming to the stage!



吉本です。「菊屋」さんというのは遠くで見ていると、ちょうど詩人の「ひょうきん族」みたいなもので(会場笑)、非常に活性があって、しかもためになる(会場笑)催しをいつでもやっておられるというふうな思っていましたので、実はおそろおそろ、その、ぼくは「井上ひさしの離婚問題」という話をしようと思うんだけどどうだろうかというふうな(笑)申し上げましたところ、主催者のほうでは、それは困る、もっと真面目な話をしてほしいという(会場笑)、真面目な話ならどんなに暗くてもいいという(会場笑)御許可をいただきましたので。それともうひとつありまして、今ぼく、要するに、今おまえが何を考え何をしようか、つまりどういうことをやっているのか、どういうことをやっているのかというのはいくらもそういうことを表現しているのかという意味ですけど、そういうことをちゃんと真面目に話してくれればいいということですので、そのようにお話ししたいと思います。

あの、何をやるうとしてるかということとをまず申し上げますと、ぼくは二十年ぐらい前に「言語にとって美とは何か」という文学を言葉の表現として考えた場合に、どういう問題があつてどういうふうなそれは処理される問題だということについて、自分の考察を述べたことがあります。で、それにざらえて申し上げますと、現在ぼくがしようとしていることは、文学自体も含めて、あの「何といましようか、映像あるいはイメージの統一場として考えて、その理論的なことをやってみたいというふうな考えていると思います。ですから、何をいいますか、もっと拡大した言い方言えは、すべて表現あるいは生涯でも何でもいいんですけども、物の生涯でも何でもいいんですけども、つまり表現されたもの、物、物、物、物、物の領域をですね、要するにイメージの問題として扱いたい、扱おうことができるのではないか、又、扱った場合にどういふことがてくるのか、ということとを今やろうとしているというふうな自分では思っています。そうすると文学自体もイメージとして扱わなければならないわけです。で、その問題についてはのちほど、

どういふ処理をしているかということとを申し上げてみたいと思います。いずれにせよ、それが今ぼくがやっている最大の、と言いましようか、主な仕事のモチーフだということに考えていただければいいと思います。

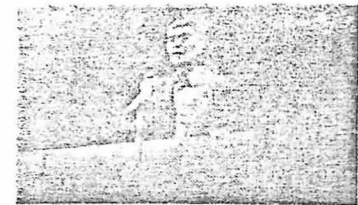
そうするとこのモチーフはどういう原理原則でもってなされているか、ということから申し上げますと、まずひとつは、究極映像という考え、究極映像あるいは究極のイメージという考え方がぼくのなかにあるわけなんです。で、現在、究極の映像あるいは究極のイメージというものはどういふふうにしてつくればいいのかついでに、最新のコンピューターグラフィックスの技術が開発されていますから、そのコンピューターグラフィックスの技術でできている映像というものを、或る種の特異な条件のもとで見ようというふうに、現在考えられる限りでの究極のイメージ、つまりこれ以上高次のイメージあるいは映像はつくれないという映像をつくることとができます。で、ぼくは筑波の科学万博というのを見に行ってきたんですけども、例えばその富士通館ではどうしてかいいいますと、コンピューターグラフィックスのように、つまり刻々時間と共に変化する立体映像というのがありますと、それをまあ、これはいろいろの技術的な処理がそこにあるわけですけども、色差式がいいですか、赤色と青色の眼鏡をかけてそれを見ますと、コンピューターグラフィックスの立体映像自体が空間のなかに浮かびあがってきます。で、浮かびあがってきて、こころへん、左右前後を飛んでいくというふうな、そういう映像が得られます。で、ところで、この映像はこれだけではそんなにたいしたアレじゃないんですけども、富士通館っていうのがなぜばくらを驚かしたかかっていいいますと、つまり、皆さんのような客席っていうのを非常に高い所に持ち上げていくわけです。そして全部ドーム型の内壁なんですけども、ドーム型の内壁全部を映像スクリーンにしているわけです。だから意識してやれば別ですけども、意識しない限り、どこを見ても自分がその、

コンピュータグラフィックスの映像が立体的に浮かびあがっている、いいですか、立体的に浮かびあがって前後左右に飛ぶって、飛んでるそのなかで自分も、なかに自分も存在して、飛ぶひととして見ているっていうふうな映像が得られて、どこに視線をやってもそれが転落すること、現実空間のなかに転落することがないようにつくられていたわけです。そうしますと、こういうふうにして得られた映像ってというのは、現在考えられる限りでの最も高次の映像です。あるいはそういう言い方をすれば、究極の映像だということにいうことができます。で、究極映像のつくり方はひとつはそういうことだと思えます。

て、もうひとつは我々にはわりと親しいわけで、それは何かといいますが、ぼくは実例を調べたことありますけども、よく、死にかけてまた生きてきたってというひとが体験してる世界があるわけです。そしてそれは、まずその世界は、まあ、どこかあの世に行っていてまた帰ってきたって感じなんですけど、その映像を調べてみますと、よく調査してみますと、そういう体験をしたってというひとの意識のなかで必ず通過している一箇所があるわけです。それはどういう映像かという点と、つまり、自分が横たわって危篤になっている、死にそうなんて、大慌てで医者や看護婦がごそこそ動き回っていて、近頃や何かがあるうろたえたり泣いたり取りすがったりしている、そういう映像が自分の部屋の外のほうから、自分を取り囲んでそういうふうに行っているひとたちの姿が全部見えた、っていうのがまず始まりなわけです。そこからいくわけです。それが見えてそのあとに、例えば、どこか暗いところを飛んでいったら向こうに光が見えたので、そこを行こうとしたら何か、何かそれを妨げる人の影とか何かがあって、こっちに来るなっていうから戻ってきたら、要するに意識が回復したとか、ま、それはいろいろあるわけですけども、それは個人差があるわけですけども、一応の体験というのはそういう体験なんです。それでこれは、例えば民俗学がよく記述しているアレでもあります。つまり例えば「遠野物語」という柳

な眼目になっているわけですけども、そこで見られたと称されている映像っていうのもやっぱり同じことになりました。つまり、同じように、やっぱり詳細に記述してるといえないと拘らず、自分の姿が、自分が空中に浮き上がって見ていると、自分が地面に座っている姿あるいは寝ている姿が見えたとかっていう、そういう体験を経て、要するにそういう死後の曼陀羅の世界を遊行する、ってなことが仏教の大きな眼目になっているわけです。で、これらの理解の仕方というのは人さまざまですから、あえてこうなんだとは言いませんけれども、これはぼくの理解の仕方では、先程富士通館で見たと申し上げましたその究極映像ってのとを大変同じもんだ、っていうふうに考えております。ですからこの究極映像なるものは、現在の高度な科学技術によっても実現することができませんでしたし、それからもちろんそうじゃなくても、原始時代の、原始未開の時代の人間、あるいはごく普通のひと、あるいは仏教の修練とか民俗学者が記述している村里の伝承とか、そういうところをしばしば究極映像っていうのは見られている映像だと思えます。

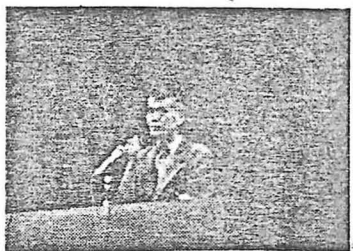
それで、死にかけたひとの映像という場合、なぜそういう映像が見られるかっていいますと、ぼくの理解の仕方では、意識が減衰、衰えていきました、つまり死に近いほど衰えていきましたときに、たぶんその映像は実現される。本当に見たかどうかってことは別として、とにかく映像としては見たっていう状態が実現できるのだと思えます。つまりこれは意識の減衰状態で実現されるわけで、また、密教の修練というのとは人為的に、つまり修練によって修行によって意識の減衰状態、死に近い状態に意識をもってゆけるかどうかという問題のように思われます。でもこれは、宗教家に言わせれば、そんなちゃんなものじゃないと言いかもしれませんが、あえてそれは主張しませんから、これはひとつの解釈と思ってください。ばいばいわけなんです。つまり、そのようにして、わりあい原始的な状態においても、あるいは瀕死の状態においても、究極映像と



田園男の編集したアレがありますけども、説話っていいですが伝承、村の伝承みたいなのがありますが、それを見ますと、やっぱりその、例えば兵隊にいて、自分は兵隊にいて兵營のなかで、その、何と申すか、逆立ちするのがもともと得意だったから木の棒のところ逆立ちの練習をしていたら、そのまま落っこっちゃった、そして頭打って意識がなくなっちゃった、それらは自分には地上何メートルかのところを飛んで故郷に帰っていった、それらは故郷では奥さんと兄嫁が小川で足を洗ってた、そして家へ入っていくと、家のいるのそばに母親がいて、母親が長いキセルで煙草をのんでいる姿があった、それで何となくこれは居る所じゃないみたいな感じがして戻ってきたら、意識が醒めた、それで兵營から手紙をやって、こういうような映像を自分が見たけれどもって言ってやったら、そのとき母親も奥さんも兄嫁も、要するに愛な白い影がやってきて、何かうろたえてやってきて、そして家のなかに入ってそのいるりばたのところですつと消えちゃったっていうことがあった、っていうふうな、そういう手紙が返ってきた、そしてそれが期日が一致していた、みたいな話があるわけです。それからもうひとつ、まだもうひとつあります。つまりもうひとつは、要するに仏教です。つまり東洋の宗教です。東洋の宗教のうち浄土教に属さない、つまり密教の世界とか、あるいはそれより以前のヒンズー教の世界なんかにはよくあるんですけども、つまり何と申すか、死後の世界っていうのがあって、その死後の世界をどうやって実現して、そしてそこに自分が遊行するっていいですかね、修行する、その世界を修行するかってことの修練が、まあ、密教の修練の一番大きな修練になるわけです。つまり、死あるいは死に近い状態に自分の意識をもっていくって、そして、曼陀羅の世界といいますが、曼陀羅の世界といってますけど、そういう仏教の様々な、地獄があったり極楽があったりする映像があったりするわけですけども、そういう映像を遊行してくるっていうような、遊行してこれるっていうことが、密教なら密教の修練の、あるいは原始的な仏教の修練の非常に大き

現できることがわかります。

で、このような映像というのを、つまり原則としてどういふふうかに、ぼくが考えたのは、究極映像というものをいばひとつの、何と申すか、原基といえますか基軸といえますか、基軸として映像の統一の場の理論といえましょうか、何かそういうものがつくれないかっていうふうな考えていたわけです。そうしますと、究極映像というのはどういふふうなすれば普通の映像に翻訳できるか、あるいは対応させられるかと申しますと、これはすぐにわかることなんですけども、それは要するに、我々が目の高さで見ている立体像と、それが真上から降りてくる視線とを同時に行使して、あるときの立体像に対して、同時に垂直に真上から、同時に真上から、真上から見おろしている視線と、この視線とを同時に行使して、真上から降りてくる視線と、そのふたつに視線の軸を分解できると考えれば、それは究極映像からの考察にあたるっていうふうにはぼくは考えてきました。そうしますと、そういうところから文学のみならず、もちろん映像芸術はそれ自体としてですけども、文学も、文学の表現もそうであるし、もつと、今またそういうことをしてないですけれど、経済学的な範疇ってものですね、例えば商品っていうものを価値概念として見るのではなく、商品っていうのを映像概念っていうふうに見ていった場合には、ぼくはやっぱり同じように商品の生産あるいは商品の産出っていうものを同じように扱えるのではないかってふうに思っています。つまり、これはやってみないからまだわかりませんが、これからやってみるつもりでありますけれども、つまりそのようにして今、究極映像とていふような状態、また



それを分解して立体的に見える、立体視できる映像と、それから同時に真上から降りてくる視線を同時に行使した、そういう考え方からする映像の統一的な理論というのができるんじゃないか、ということの、ぼくらの考え方の根本になったわけだ。

で、そこでもって、そうしますと、何ていいますか、その、究極映像っていうのは一体どういう意味をもつか、あるいは究極映像のなかで特に究極映像ってことに参加している真上から降りてくる視線っていうものですね、これはぼくらが勝手に世界視線っていうふうに名づけて、この世界視線っていうものはどういう意味をもつか、ということにまず考えていったわけです。するとまず第一に、今申し上げましたとおり、それは究極映像をつくる場合に必ず参加せざるをえない視線だ、ということはひとつ言えるわけです。それからもうひとつ、これは重要なことのように思われますけれども、もし原始未開の人たちがですね、立体的な目でもって見える、物が見えるっていう、見える映像というものと、それから同時に上から降りてくる視線っていうのを同時に行使するっていう術っていいまいしょうか、そういうことができるようになったときに、そういう言い方をしますと、人間はつまり猿から進化したんじゃないのか。つまり猿と人間との区別っていうものを言葉ってことで言語ってことではないで、映像ってことでいいと、どこで猿と人間とを区別するか、あるいは人間は猿と自分を区別したかっていうふうに考えますと、それは要するに、立体的な目で見える物の形とか映像とっていうものと、同時にそれが上から見られて、見ることができているっていう、そういうことが可能になったとき、初めて人間は、あのー、つまり、人間は人間になったのではないかっていうことが、これはいえるわけです。そうしますと、そんなことって何ができるかっていいますと、言語っていうもの、言葉っていうもの、あるいは言葉の概念っていうものと、それから映像との対応ができるってことになります。つまり、言葉の概念とは、概念を全く映像に翻訳してしまつたら、全部映像に翻訳してしまつたらどうい

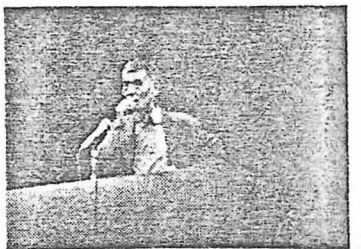
箇所があります。で、この箇所は、例えば宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』っていう作品がありましよう、それでその『銀河鉄道の夜』っていう作品でその場所をあげれば、例えば、『白鳥の停車場』っていう所にジョバンニもカムパネルラも一緒に降りてゆくところがあります。降りて、銀河の流れのどこの河べりまで降りてゆくところがあります。そして河べりのところで、その何ていいますか、原文の描写は「水素よりも透明な」と書いてありますが、水素よりも透明な水が流れている、と、そこそこ手に手を浸すと手のところに何かキラキラした輝きが、透明なだけキラキラした輝きがちゃんとあるからこれはやっぱり水だってわかる、っていうふうなジョバンニとカムパネルラが銀河の透明な流れのなかに手を浸すところがあります。そうすると、ところがその宮沢賢治の描写がそういうふうなうまくできているわけですけども、つまりそういう、あたかもカムパネルラとかジョバンニが自分が銀河に手を浸してキラキラと透明な輝きが手のまわりにできているっていう、そういうのを見え方と、もうひとつその、何か、えー、つまり、銀河鉄道の列車のなかからの視線でもっと遠くからの視線でもいいんですけど、それがそうやって透明な水のところに手を浸しているジョバンニとカムパネルラの二人を、二人をもっともうひとつ遠くのほうから見ている視線っていうのを感じさせます。つまり、『銀河鉄道の夜』っていうのは一番それがわかりやすいですけども、そういう箇所『白鳥の停車場』の箇所ってのはまさにそういう箇所として、つまり一見すると、ジョバンニがこうやって手を浸したら手のまわりにキラキラと輝きが見えたとてふうな描写してあるんですけども、その描写の位置が非常に微妙なために、ジョバンニがそうしてていう描写と同時にそれは、そういうふうなやつてあるジョバンニをもうひとつ遠くのほうから見ている視線が見えている、っていうような映像がその箇所では浮かび上がります。『銀河鉄道の夜』のなかに幾つかのそういう箇所があります。つまりこういう箇所

とになるかっていいますと、それは要するに、立体的に見える、つまり何ていいますか、猿なら猿って言葉があるとしみますと、猿って概念はどういう映像かっていいますと、猿の立体的な視覚的な立体像に対して上から同時に、それを近くで見ている自分を含めて上からもう一度視線がそれを見ているってことが同時にできていたら、映像というものは概念に転換できるっていう、対応できるっていう考え方ができると思います。そうしますと、要するに、言葉を獲得したときに人間は人間になったんだ、あるいは猿から人間になったんだっていう言い方とそっくり同じように、今言いました立体映像と上からの視線、上から見える映像を同時に加味することができるときに、人間は人間になったんだ、あるいは猿から進化したんだっていうふうな、そういう言い方もまたできると思います。

つまりこういう言い方をしますと、要するに、何ていいますか、映像と概念、言葉の概念との対応性が、大ざっぱな言い方をしますと、対応性がつくことになりまう。つまり、これがつきますと、文学の作品というものを映像として、つまり統一的に理解する場合の基礎が得られます。つまり文学作品を皆さんがお読みになればわかりますけど、いくつかの、何ていいますか、文学作品の成り立ちはいくつかの要素に分解することが出来ます。で、ひとつの要素はむしろ言葉の概念的意味です。概念的意味が要するに作品の物語を進行させているということがわかります。これは一番わかりやすいことです。で、もうひとつは、概念の像、概念のイメージっていうものがとどこどこに喚起される箇所がありまして、それが文学作品を文学作品にしている、つまり論文と文学作品とどこが違うんだっていえば、概念自体がそのままイメージを喚起する箇所があります。作品のなかにあります。つまりそういう箇所があるってことがまたひとつ文学作品を文学作品として成立させているってことがわかります。それからもうひとつあります。もうひとつは今言いましたように、言葉の概念が全く全部、つまり百パーセントですけれども、全く映像に転換されているか、とく見える作品の

は典型的に言葉の概念が、まあ言ってみれば、全部映像に転換された箇所だ、っていうふうなことができると思います。つまり文学作品のなかに、もし文学作品の特徴、文学作品とは何かっていうことを言いたいならば、その三つの要素のないまぜられたものとしてひとつの文学作品というのは成り立っているっていうことが簡単にいえます。そうして、文学作品はそういう箇所が、つまり概念が映像をイメージを喚起したり、あるいは概念が、言葉の概念が全く映像そのものに転換されちゃたりして、そういう箇所をしばしば我々は文学作品のなかにクライマックスだ、っていうふうな、ここはこの作品のクライマックスだ、っていうふうな読んでいる箇所はしばしばそういう箇所が該当することがわかります。しかしこれは必ずしも百パーセントそうじゃなくて、そうじゃなくて、そういう意味あいての頂点に位置するところ、物語としての頂点に位置するところがずれている作品もあります。それからまた、一箇所だけでなく何箇所もそうだっていう作品もあります。ですから一概には言えませんが、要素としていいますと、その三つの要素というものがよくないまぜられているものが文学作品だ、っていうふうなことができると思います。そうしますと、ここでいって、文学作品というものもまたひとつの映像あるいはイメージとして統一的に理解するっていう、少なくともそういう場所が得られるってことになると思います。そういうことがひとつ、世界視線ということが加味されたことの重要な、大切な意味にひとつなっています。

それからまだあります。それは、まだこの世界視線というのには、まださまざまな意味づけができます。で、もうひとつ例えばその意味づけを申し上げてみますと、それは一種の、世界視線、上からの視線っていうのは権力線だ、ということ。権力のラインだ、ということ。権力のラインっていうのは、そういうふうな上からの視線のどこにつかまっているかっていうことによって、権力のラインっていうのを比喩することが、あるいは暗喩することができるといえます。例えば、我々は要するに、我々が例えば人間と



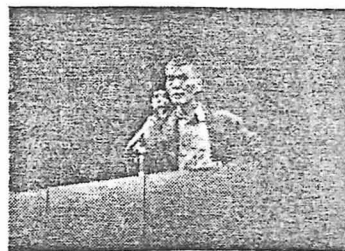


人間との関係で言っているもの、あるいは人間と人間との関係のなかにヒューマニズムがなければいけないことを言っている場合には、それは目の高さの視線で相互の人間が見合っていることを意味します。ですからそれは世界視線からいえば、目の高さ、つまり一メートル五〇センチとか二メートルの視線のところにつかまっているという、それがヒューマニズムのあり方だということにふうにいうことができます。そうすると、ヒューマニズムは人間と人間との平等の原理を実現することを理想とするんだということにふうにいう場合には、要するに誰も一メートル半か二メートル以上の視線には立たないことにしようじゃないか、あるいは立っている奴がいいたら引きずりおろしちゃおうじゃないかっていうような意味あいをもつと思えます。それから例えば、もう少しアレスしますと、その一、例えば古代の王権国家みたいなもの、王権あるいは支配者というものはだいたい村はずれ、あるいは部族が住んでいる所はすれの所に小さい小高い山とか丘がありまして、それはだいたい「国見の丘」みたいなふうな名前がついているわけですけども、その「国見の丘」の上に立ってそして下のほうを見ると、村落の家の建ち方とか田圃のあり方みたいなものを見て、そしてそれを眺めてそれでもって、俺たちの支配している民は安全であるとか飢えていないとかって、そういうふうに見るという儀式があるわけですけども、支配の儀式があるわけですけども、それらは言ってみれば、村はずれの例えば三百メートルか五百メートルぐらいの高さの丘の上から見た視線だということなことを意味します。つまり、そういう所に立っている視線と、それから地上二メートルの高さしかもてない視線との間の差異というものが、支配と被支配の差異に、まあ大ざっぱにいいますとそういうふうな該当するわけです。そしてそれがもって現在に、現代になりますと、いってみればそれが航空機、高度一万メートルの航空機なら航空機から見られた視線というのが人間の表現している視線に任せていたという場合には、それは、その四十五階の高さ

都市像を想定しまして、そこでそういうふうな、住民たちがそういう自由度をもちえたときに、そして平等であったときに、それが理想の都市像だということに考えたわけです。ところで、現在例え、このつまり、現在の世界都市というのは全部一様に大都市であり、しかもまた拡張しつつある、拡張しつつ動きつつある大都市であるわけで、つまりこのなかでどうやって理想の都市像というのを描けるのか描けないのかって問題が、まあ、大変重要な問題として現われるというふうな、ほく自身はそう考えたわけです。それで都市問題について幾つかのことをしたわけですけども、そのなかでいちいち申し上げなく……もしあれでしたら、ほくの書いたもの読んでくださいばいいと思いますけども、ここで要約して申し上げますことはひとつあって、あの一、つまりドリームランドに最短距離で走れるひとつなわけですけど、現在の世界都市、つまりもつと別のい方をすれば現在の先進社会ですね、西欧と日本もその仲間に入れます先進社会における大都市というものの、この大都市が世界都市であるということの条件は何だるうかということがあります。この条件は幾つかあるわけですけども、そのうち重要なのはたぶん二つなわけなんです。そのひとつは何かかっていいますと、今申し上げました、今まで申し上げてきました高次映像ですね、つまり次元の高次の映像というものを喚起する、つまり呼び起こす場所というものが都市のなかに存在することは、ひとつの世界都市の大きな条件なんです。で、もうひとつは、我々がその映像を見た場合に非常に異和感を喚起する場所、あるいは異化された場所、つまりこれは何かっていいいますと、えーと例えば、ほくはそういう例をあげてありますけども、ビルはなかに日本庭園を造ったり、お茶室を造ったり、あるいはビルの屋上に教会を造ったりという所がありますけども、あるいはゴルフ場を造ったりとか、プールをビルの三階に造ったりとかっていう所は具体的にありますけども、つまりそのように本来地上にあるべきものっていうようなものがビルのなかに内包されてしまっている、そういう箇所ってのが都市のなかに、

人間との関係で言っているもの、あるいは人間と人間との関係のなかにヒューマニズムがなければいけないことを言っている場合には、それは目の高さの視線で相互の人間が見合っていることを意味します。ですからそれは世界視線からいえば、目の高さ、つまり一メートル五〇センチとか二メートルの視線のところにつかまっているという、それがヒューマニズムのあり方だということにふうにいうことができます。そうすると、ヒューマニズムは人間と人間との平等の原理を実現することを理想とするんだということにふうにいう場合には、要するに誰も一メートル半か二メートル以上の視線には立たないことにしようじゃないか、あるいは立っている奴がいいたら引きずりおろしちゃおうじゃないかっていうような意味あいをもつと思えます。それから例えば、もう少しアレスしますと、その一、例えば古代の王権国家みたいなもの、王権あるいは支配者というものはだいたい村はずれ、あるいは部族が住んでいる所はすれの所に小さい小高い山とか丘がありまして、それはだいたい「国見の丘」みたいなふうな名前がついているわけですけども、その「国見の丘」の上に立ってそして下のほうを見ると、村落の家の建ち方とか田圃のあり方みたいなものを見て、そしてそれを眺めてそれでもって、俺たちの支配している民は安全であるとか飢えていないとかって、そういうふうに見るという儀式があるわけですけども、支配の儀式があるわけですけども、それらは言ってみれば、村はずれの例えば三百メートルか五百メートルぐらいの高さの丘の上から見た視線だということなことを意味します。つまり、そういう所に立っている視線と、それから地上二メートルの高さしかもてない視線との間の差異というものが、支配と被支配の差異に、まあ大ざっぱにいいますとそういうふうな該当するわけです。そしてそれがもって現在に、現代になりますと、いってみればそれが航空機、高度一万メートルの航空機なら航空機から見られた視線というのが人間の表現している視線に任せていたという場合には、それは、その四十五階の高さ

ていうのは、せいぜい人間が、我々が住んでいる高さの限界だということになるわけです。ところで、今例えば、権力線という意味をもつと誇張していいいますと、例えば、現在例えばアメリカとソ連みたいな大国が争っているような視線はどうかっていうと、これは地上数十万メートルの視線です。つまり、これで、これ（横に掲げてあるランドサット・マップを指さす）。数十万メートルの視線の独占権を争っているというのが、現在の宇宙競争といましようか、世界視線のなかで地上数十万メートルの視線を俺たちのほうだけが独占したいとか、いやおめえらだけ独占させねえぞとか、そういう争い、あるいは交渉が知りませんが、そういう権力の争いっていうのは、つまり世界権力の争いっていうのは、いま世界視線に則していえば、地上数十万メートルの高さを独占するかしないかかって争われているというふうなことになるんです。つまりこれは権力線であります。権力線になるわけです。ですからこの権力線に対して、例えば、もし民衆っていいいますか、我々が例えばこの権力を解体させたいと思えば、要するに、何ていいいますかね、究極の世界視線というものを我々が獲得すればよろしいわけになります。比喩として申し上げますと、つまり究極の世界視線、つまり無限遠点から降りてくる視線、垂直に降りてくる視線ってものを、我々がその数十万メートルで争っている世界権力に対してそれを獲得してしまえば、たぶんこの二つの体制の争い、つまり共存共闘関係の争いっていうようなもの、あるいは核戦争の危惧から何から全部、戦争の危惧っていうのを専売特許で請け負っているその二つの世界権力を解体させるってことをしたいならば、我々は無限遠点から降りてくる世界視線というのに早くつかまってしまうばいいわけになります。つまりこのように考えますと、世界視線、つまり上から降りてくる垂直の視線っていうのは、一種の権力線の象徴だということもまたできると思います。つまり、これは要するに、何といいますが、今申し上げましたようなことが、つまり



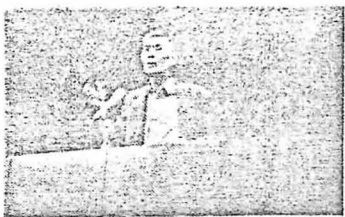
つまり世界都市っていわれる条件をもつものなかには必ずあります。で、もちろん日本にも、例えば東京でもありますし、名古屋なら名古屋でもぼくはあると思いますけども、つまり、そういう箇所があります。つまり、異和感あるいは異化作用っていうものを映像に対して与える箇所があります。で、この二つの箇所が、ぼくの理解の仕方では現在の世界都市の非常に大きな条件だっているように思っております。で、それをちょっともう少し説明しますとね、その、何ていいますか、高次映像を喚起する場所っていうのはどういふふうにしてできるかっていいますと、例えば本来的に都市のビルの配置としてはこれ以上密集することはできないはずだっているような所が、過当競争か何かかわかりませんが、とにかく過密状態になったときに空間が一種の、都市空間が、建物あるいは室内や広場についても含めて都市空間があつて、何ていいますか、折り重なる場所があります。つまりこの場所は高次映像を喚起する場所です。例えばひとつのビルの室内から隣に見えるビルを見たんだと、そして隣のビルを見たら隣のビルでいるんな人がビジネスをやつて動き回つたと、ところがその隣のビルのその部屋の向こう側の窓からもうひとつ向こうを見たら、そして新幹線がそこを走つてと走ってきたんだと、そして新幹線のなかには人が動いていたんだ、人が乗ってんのが見えただっていふふうな、もしそういうつまり偶然の場所、偶然の箇所で見たとすると、その瞬間にたぶんそのひとは大変高次な映像を見てることがいえると思います。つまりそのような箇所っていうものは、都市の建物本来そうあるべき配置以上に過密化した箇所だ、二つの空間が折り重なつたところで、これは室内的にも屋外的にも室外的にも高次空間、高次映像を喚起する場所あるいは瞬間があります。つまりその箇所は大変重要な箇所だとぼくは理解しています。なぜならば都市っていうものが、いつてみれば本来自然に発展すべき、自然に発展して無理なく発展したっていう限度を超えて、いつてみれば限度を超えて発展してしまつた箇所を、その箇所が象徴しているからです。だからこれは非

常に重要な箇所だっているのがぼくの理解の仕方です。だからもし都市っていうものに目をつけたいならば、その箇所に目をつけるべきだっているのがぼくの理解の仕方です。それからもうひとつ先程言いましたように、本来地面の上にあるべきお茶室とか庭園とかブールとかそういうものとか、あるいは農場とかね、農業やるどころとか、あるいは本来地面に建てるべき教会とかそういうようなものがビルの屋上に建つていたっていうようなことは、つまり大変異和感を催すわけですけども、その異和感を催すって箇所は、いつてみれば、何ていいますか、えーと、ぼくの理解の仕方ではつまり農村から都市ができたこと、つまり農村からまあ例えば産業が発達していつて農業が農村が家内工業としてそれを処理できなくなつたときに、つまりそういう産業をもつと別の所をつくらうってなことでいわば工業ができ、そして人がそこに移動して都市ができたっていうのが、いわば人類の歴史が自然的に生みだした都市の概念なんですけども、そういうふうな都市の概念ですね、つまり農村から産業の発達、分業が発達して分離して都市ができざるをえなくなつたっていうように、つまり自然史の発展過程が自然に発展していつてきた都市っていう概念が壊れている場所が、ぼくの理解の仕方では、ビルのなかに人工栽培の農場があつたり、栽培場がつくつてあつたり、でなければ茶室がつくつてあつたりかかっていうような箇所っていうのは、いわば自然にできた都市っていういまいましようか文明が発達して自然にできた都市っていうのがすでにそのところで終わつたっていうこと、終わつて何か自然じゃない異化作用を催す都市がそこに、ビルのなかに実現されているっていうことを意味しているってぼくは理解します。だからその箇所は非常に重要な箇所だっているように、ぼくには思われます。つまり、あの、何ていいますか、格好いい言い方をすれば、つまり、農耕地帯が自然に発達して、産業の発達と共に発達して都市ができたって、そして都市と農村が対立分離してきて、つまり対立するようになって、工業と農業がいわば文明史のなかでさかんに葛藤を演じるようになったって

いふような、そういう言い方をいわば自然史の延長線における文明っていうふうに考えますと、今言いました異化作用を及ぼす箇所っていうのは、そうじゃなくてもはや、農村と都市とが包むか包まれるかかっていう関係以外にはもう成立しようがなくなつたっていうこと、つまりそういう自然史としての都市っていうものいわばどどんづまりがそこに実現されちゃつて、やむをえず実現されちゃつて、そういう箇所を象徴する、あるいは暗喩するっていうふうな考えますと、その箇所はとても重要だつてふうな考えます。そうするとぼくの考えでは、現在世界都市といわれているものは、今申し上げましたその究極の高次映像を喚起する場所と、それから今言いました自然と人工とがいわば異化作用を、同じ箇所でも異化作用を及ぼしているっていうふうな箇所と、その二つの箇所を備えているっていうのがたぶん現在の世界都市っていうものの大きな条件であるって、ぼくには思われます。つまりその二つの条件に着目すると、現在の世界都市っていうような問題にどどんづりついていく、つまり接近する方法が得られるんじゃないかかっていうようなことが、ぼくなんかの理解の仕方です。

そうしますと——もう五分ですけど、『ドリームランド』に入れるような気がしてきました(会場笑)——つまり、その、ドリームランドとは、ドリームランドってのはどういふふうな描くんだったっていうことがあります。で、ドリームランドには幾つかの条件が、現在ドリームランドを描く場合に幾つかの条件があると思います。ひとつの条件が、今、先程言いました異化作用を及ぼす箇所、あ、その前にちょっと言っておきます。世界都市の条件として申し上げました二つのことですけど、つまり高次映像を喚起する箇所と異化作用を及ぼす系列の箇所ですけども、それは言ってみれば自然都市の終焉っていう、つまり終わりっていうことと、それから人工都市の、つまり、もしかすると歴史が新たな段階に入ったのかも知れないよっていうそういうことを、つまり歴史の新たな段階っていうものを象徴する箇所と、つまり終焉と象徴を、終焉とその新たな展開とを

象徴する箇所だっていることができていふふうな思っています。これは逆に言うともいえるわけで、両方とも終焉だと思つてるともいえるわけだから(笑)逆に言うともいえるわけですけども、ぼくは終焉と誕生と、誕生と、と言いましようかね、新たな生成との二つを象徴する箇所だっているふうな思っています。そうしますと我々が現在ドリームランドってものを描けるとすれば、今申しました異化作用を及ぼす箇所の問題を拡張する以外に方法はないっていふふうなぼくは考えています。ですから、つまり、どう言つたらいいんでしょう、都市が黙つておけば生物と同じようにこれ以上膨張していつて、豊橋市と名古屋市とかかくくつていつてしまつていふふうな膨張していつていこうし、東京と横浜はくつていつてしまつし、東京はどこまでいくなかって、山梨のほうまでいくんじゃないかっていふふうな、つまり富士山のふもとまでいくんじゃないかっていふふうな、つまり現在も刻々と膨張しつつかあるわけで、この膨張しつつかあるは、これは生物のように膨張しつつかあるように思っています。それからもうひとつは、密集しつつかある、過密しつつかあるっていつていふふうな、自然延長しますとそういうふうな考える以外に仕方がないわけですよ。だからそうだったら農村ってどうするんだ、農業っていうのは、とかね、自然をどうするんだ、自然はどうしたらいいんだ、っていうことになりまして、そうするとそれに対して、自然はどうしたらいいんだっていう場合に、さかんに現在やられている運動っていうのもあります。それは自然を守れっていう運動です。それで、守れっていう運動は現在やられています。それでぼくはこれは保守的なひとがやるんだと思つたら、そうじゃなくて進歩的なひとがそれはやります(会場笑)、守れっていうふうなやっています。しかしぼくはそれは思わないんです。つまりそれは、ぼくはそうは思つてなくて、都市問題っていうもの、あるいは人間の自然史の延長としての都市っていう概念は、たぶんある部分部分から



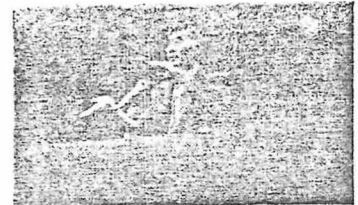
終焉に、つまり世界都市の部分から終焉にだんだんきつつかあるって
いうふうにはぼく自身は思っているわけです。そうするとこれを防ぐ手
だてていうのはぼくには考えられないです。つまりぼくは考
えることができないです。これは社会主義政権になれば止まるん
てことは、ぼくは絶対的にありえないと思っています。つまりこ
れは何政権であろうと同じこと、これは文明史あるいは科学技術史
の、あるいは人類の科学理性の問題が本質的にありますから、な
なかこれは、政策あるいは法律によってこれを禁止することに
禁圧できるか、都市の膨張は禁圧できるか、あるいは科学技術の
発展を禁圧できるかっていうと、ぼくはどんな中世的な暗黒な政府
ができてもしそれはぼくはできないだろう、あるいはできて現実に弾
圧しても、それでも地球は生きていていうふうには言ひたいとい
うと思います。つまり科学者はそう言うだろうと思います。ある
いは科学理性というものはそういうものに違いないっていうふう
にぼく自身は思っています。そうするとぼくの理解の仕方では、ド
リームランド、現在描きうるドリームランドって言うのは、十九世紀
のユートピア主義者っていうのと違って、つまり都市のなかに農村
を包括させるとか、都市のなかに天然自然よりもっと本質的な自然
っていうのを内包せしめるっていいですか、造ってしまおうって
そういう考え方をとる以外にないんじゃないかっていうふうには
思います、思っています。だからその箇所を象徴するのが、先程
言いました異化作用を及ぼしている箇所です。これは自然にできた
異化作用なんですけども、この異化作用っていうのを拡張しまし
てもしこれに意識的なあるいは意図的な構想っていうのを加えるこ
とができるならば、これはドリームランドの条件ができるんじゃない
か、また、これ以外に現在ドリームランドっていうのは描きよ
うがないんじゃないかっていうふうにはぼく自身は考えております。こ
のところは本日は現在が一番考え所の問題のように思っています。で、
わりあい進歩理性みたいなものが現在自然を守れとかっていうよ
うなアレじゃやってくるから、ぼくはこれはなかなか通りが悪いですけ

ど、ぼく自身はそうじゃないっていうふうには思っています。で、こ
れは現在の相対に重要な問題のように思っています。つまり簡単に結
ぶけてもいけないし、簡単にぼくは自分の主張は正しいみたいなこ
とは簡単に言わないことにしていますけれども、しかしその問題は
確実に喚起されているっていうふうにはぼく自身は考えているって
ことを皆さんにお伝えしたいってことは、ドリームランドの条件と
してもしなくても必要になってくるわけです。
それからこのドリームランドの幾つかの条件を、まあ、またあ
げてみましょう。で、もうひとつ条件をあげてみるとすれば、それは
どう言ったらいいんでしょうね、つまり、簡単にドリームランドを
造ろうと思ふんならば、設計図ならば専門家が、幾分野かの専門
家が集まれば設計図だけは現在作ることが出来ます。これはつまり人
工都市っていう問題になりますけど、人工都市っていうのは専門家
が衆知をすれば設計図だけは出来ます、つまりこうやれば理想的
に違いないって設計図を、都市の設計図を作ることが出来ます。
で、ところでその設計図を誰が実現するのかっていうことになりま
す。もちろんぼくにはそんな金もないし力もないですから、ぼくが
実現するはずがないのでありますけれども、しかしこれは誰かが実
現するとなれば、誰かに所属してしまうわけです。つまりこれは保
守政府がそれを人工都市を造ろうとしたならば、それはたぶん、設
計図だけは理想の設計図を、専門家を集めて衆知を集めればでき
るわけだし、金も持っているでしょうから、やろうと思えばできるわ
けでしょうし、土地も持っているでしょうからやるでしょうけれど
も、しかし、これは例えば政府が、保守政府がやっても進歩政府が
やってもいいんですけども、それがやれば所属してしまうってこと
があるわけなんです。で、これはまた逆のことを言ってもいいです。
例えば総評なら総評が、ま、労働金を潰してもいいから造ろうじ
ゃないかっていうふうになって、やったらすると、たいてい総評で
も同じで、自分のほうに所属させようというふうには考えと思いま
す。だから労働者優先であるというふうないい方を、つまり所



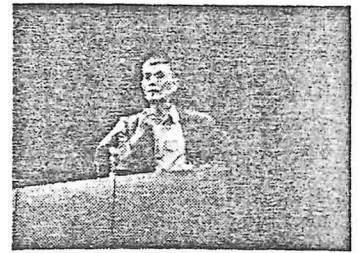
属権を、それからまた保守的な奴はあまりいれないと、進歩的だと
わかる奴だけいれるとか、そういうつまり、いずれにせよ所属して
しまわなければならないわけです。それから西武の先生みたいに、堤
さんみたいに、そういう資本家が人工都市を造るとします。そした
らば、それ相当に考えますから、できるだけ西武色はなくそう
いうふうには思っていますけれども、それにも拘らずどうしてもにじ
みだしてしまわなければ、所属してものが(会場笑)。あのそれは、例
えば「塚しん」大阪に「塚しん」って西武が造った人工都市があ
りますけれども、そこに行くと御覧になればすぐわかりますけれど
も、どうしてもそれは払拭できないんです。だから現在どんな立場
のひとが、あるいはどんな党派のひとが、人工都市を造ってそれを
ユートピア的な都市にしようっていうふうには造って、それは金をだ
す奴もいたと、金もあつたと、で、やっただけでいうふうにはアレして
もどうしても最後にいわば所属して問題がでてきちゃう、所属
の党派性ってのがでてきちゃうわけです。で、ぼくの理解の仕方
では、たぶんそれは駄目じゃないかっていうふうには思われるわけ
で、もちろん例えば反体制的な所属の人工都市を造ったら、すぐに
法律に抵触したりあるいは保守政府がすぐに弾圧したりしてしま
う、それはもちろんすぐに現われるでしょうけど、そうじゃなく
て、そうじゃなく政府が造ったって市町村が造ったって、ある
いは資本家が造ったって、所属って概念がどうしてもつきま
まうんです。だからたぶんものすごく必要なことは、それぞれ
そういう構想をつくり出してやるほどの、そういう人たちがいたら
ば、それはぼくは誰でもいいわけですよ。つまり政府だろうが保守政
府であろうが進歩政府であろうが、総評であろうが資本家であ
るであろうが市町村であろうが誰でもかまいませんけど、要するにそれらの人
たち、あるいはそれらの勢力が全部所属から(へ脱)だ
ってということ、つまり脱する、あるいは所属を解体するって
いう思想自体を意識的にもたない限りは意味がないと思
います。つまりユートピア都市って

いう思想ってなものをそれらの人たちがとれたとしたらば、どんな
とでもとれたとしたらば、どんな立場のひとでも(へ脱)って
いう思想をとれたとしたらば、たぶん相当いい設計図で終始する
たぶん相当いいユートピア都市っていうのを造ることは部分的には
可能だっていうふうには、ぼく自身は考えます。そうすると、ド
リームランドとしての大きな条件のひとつとしてどうしても、(へ脱)っ
ていうことがわからない思想は駄目だということになります。つまり
自分がある立場にいるって、つまり自分は労働者って立場に
いるとか、進歩政党という立場にいるとか、保守政党って立場に
いるとか、あるいはいろいろあるでしょう、あるいは自分はイン
テリゲンチヤでもないですけど、その、知識人という立場に
いるっていうのは、もちろんこれは個々個人の問題あるいは部分的な
集団の問題としては立場っていうのは避けたいものなんですけど、
同時にその立場の人たちが(へ脱)っていうイデオロギーを自分
が身につけて可能だかっていうふうには思わなければ駄目
じゃないか、つまり、(へ脱)って思想、あるいは理念
っていうものが身につけられない限りはドリームランド
っていうのは不可能であろうっていうふうには、あるいはそれが
身につけられれば、かなりな程度ドリームランドの条件は整
うだろうっていうふうにはぼく自身は理解します。
ですからその、何ていいますか、いつてみれば先程い
ましたその、何ていいますか、自然発生的な農村、あるいは自然消滅
的な農村あるいは農業って概念ではなくて、新たな概念での農
業とか、農業に付随する漁業でも同じなんですけど、漁業でも
つまり何かいわば人工物、海洋牧場的なものですけど、そういう人工
的な魚の海遊路みたいなのをやっちゃうってのは、そういう発想を
とって、魚場を封鎖されたら駄目なんだっていうふうな、
そういう発想を、人工的な海洋牧場をつくっちゃうんだ
って、そういう発想をとるっていうふうなことが、農業の場合と同
じことなんですけども、それらのものを都市が内包してしま
うって、そういう発想をとるっていうふうな、
そういう発想をとるっていうふうな、
そういう発想をとるっていうふうな、
そういう発想をとるっていうふうな、



ようなことになると思います。それからもうひとつ言わせてもらえば、先程のまたこれ延長線になりますけど、世界視線のなかで、例えばこれ(ランドサット・マップを指さして)でも同じですけど、これを見ましても、あのーこれは、必ずしも建物の箇所と田畑の箇所とそれから広っぱの箇所っていうのはこれではそんなによく区別されていないんです。つまり、これを例えば、だから世界視線が非常に高度になっていきますと、何ていいますか、そういう区別っていうのは一切同一化されてしまうわけです。それから、航空機写真だったら建物が見えて、その建物のなかには、例えばこのなかには人間が住んでビジネスをやっているとか、この畑のところにはほんとは人がいてアレスしているとか、この道路には車や人が歩いてたり走ったりするなっていうことが、航空写真だったらすぐにどんな高度のものでもそれは想定することができていくわけですけど、このくらい高度になってしまえば、このなかにも人間が蠢いているんだってことを想像することにはあんまり意味がないことになってきます。それから建物と建物でない部分を区別することにもそれほど意味がなくなってしまう。それからもうひとつは、人間と生物っていう、ほかの生物っていうものを区別することにもそんなに意味がなくなることになります。つまり今言いましたことは、あのー、この映像でもそうですけど、もっと高い映像っていいですか、高度の無限遠点からの映像をもってきますと、そんなことを言うことは全然意味がなくなるっていうことがあります。つまり、この意味がなくなるっていうことはいったい何を意味してんだっていうことについて、非常に高度に考えられている必要があるような気がします。つまりその問題は高度に解決されているっていうことがどうしても必要なような気がします。だから、何といいますが、この高度数十万メートルじゃなくて、高度が無遠慮って言うふうになったときに、いったい上からの視線っていうようなものは誰が占めなければならぬのか、つまりこれは支配者が占めるんじゃないとか、政権が占めるんじゃないかと、やっぱり一般の人たちが、一般大衆

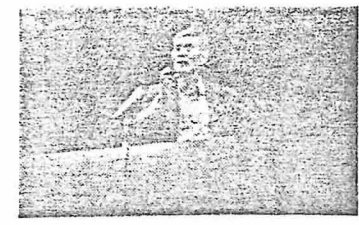
「緑の党」ってのもあります。つまり緑を守るために党派的活動をするっていう、そういう政党もあります。そのものものはたくさんあるわけです、現在あるわけです。で、例えば嫌煙権っていうのをもってくるわけでしょう、そうすると嫌煙権の有力な支柱っていうのは何かっていいいますと、それは医学的あるいは生理医学的なものだというふうに思います。例えば癌研究所の専門家が煙草を吸う奴と吸わない奴は癌のかかる率が何倍も違うんだっていうデータを提出する、するとそれは嫌煙権ってものを支えるひとつの大きな支柱になるわけです。だから今までは同じ室内で煙草を吸っている奴と吸わない奴がいたとすると、吸わない奴でどうしても嫌煙する奴は黙って窓を開けちゃったり、めだたないよう窓を開けちゃったり、めだたないように部屋から出ていっちゃったりするわけですけども、現在では逆に吸う奴はお前外について吸えっていうふうになったり、こじや吸っちゃ困るっていうふうになっちゃうようになってるわけです。それでこれがもう少しアレスしますと、今度は嫌煙権が成立しますと、法律によって特定の場所以外で吸うことはならぬという法律ができるかもしれませんし、嫌煙権運動のひとはその法律をつくるまでやるかもしれませんし、そういうふうになつてくるわけです。それでその有力な支柱っていうのはたぶん、医学的にこれはおもしろくないという結果がちゃんと出てくる、これは疑いようがないっていうデータが出てくる、それでそれからまたほんとに嫌いな奴は今まで我慢してたけど、もうこうなったら我慢しないぞっていう、極限まで我慢がきたっていう、そういうことももちろん入っているかもしれません。つまりあのー、そういうことから嫌煙権みたいな運動は出てきたっていう、ポツポツとできているわけです。するとこの問題は、例えば嫌煙権運動っていう運動は、おのずから煙草の嫌いな奴が煙草の好きな奴を駆逐する、したい、するっていうようなそういう運動でありますけれども、そういう運動として理解したらそれで終わりかかっていうと、ぼくはそうでないような気がします。つまり嫌煙権運動のなかには非常に究極的な問題が含まれ



ていわれている一般の人たちがやっぱり、その究極の世界視線、無限高度からくる世界視線っていうのはそういう人たちが自分たちの管理におくっていいまいしょうか、管理におくと。で、これ以下にある視線、つまり世界権力といえましょうか、米ソ両権力が争っている数十万キロの高さの視線なんてのは、全部無化してしまえ、あるいはすっとぼしてしまえってなものが獲得できるっていう、つまりそういうことがとても重要な気がします。つまり、そういうものを獲得していく、あるいはそういうものが獲得される方向性ってものに、権力線が無化される方向性があるんだっていうことが知られていなければならぬような気がします。この権力線が無遠慮点にくくっていいことは無限権力なわけですけども、無限権力っていうことは言い換えれば人間の権力、あるいは人間の政治・制度っていうものがつくる権力ごときものはや権力・非権力という区別の意味を失ってしまう視線でもありますから、無限権力ということと同時に無権力っていうことと同じことになるわけ、それはやっぱりどこかで民衆がそれを占めてしまおうっていうことが、ドリームランドとしての非常に大きな条件のように思われます。それからもう少し申し上げてみますと、もう少し条件を申し上げてみますと、ひとつあのー、先程から究極映像とか高次映像という言い方をしていますけれども、現在において究極っていうのをどうやって識別するかっていう問題、つまり識別するかということがつかまえていなければならぬような気がします。つまりどうやってたら究極っていうものを究極じゃないものから識別することができるかかってことについて、一種の何か、何ていったらいいんでしょう、認識論といえましょうか、そういうものをムツって獲得していかなくてはいけないような、ドリームランドにならないような気がします。例えばどんなものをもってきても同じなんですけども、あんまり当たりさわりのないように、例えば嫌煙権なら嫌煙権っていう言い方があるでしょう。つまり煙草吸う奴がいて、煙草吸うことを拒否する権利もあるんだっていうそういう運動があるでしょう。緑を守る

「緑の党」ってのもあります。つまり緑を守るために党派的活動をするっていう、そういう政党もあります。そのものものはたくさんあるわけです、現在あるわけです。で、例えば嫌煙権っていうのをもってくるわけでしょう、そうすると嫌煙権の有力な支柱っていうのは何かっていいいますと、それは医学的あるいは生理医学的なものだというふうに思います。例えば癌研究所の専門家が煙草を吸う奴と吸わない奴は癌のかかる率が何倍も違うんだっていうデータを提出する、するとそれは嫌煙権ってものを支えるひとつの大きな支柱になるわけです。だから今までは同じ室内で煙草を吸っている奴と吸わない奴がいたとすると、吸わない奴でどうしても嫌煙する奴は黙って窓を開けちゃったり、めだたないよう窓を開けちゃったり、めだたないように部屋から出ていっちゃったりするわけですけども、現在では逆に吸う奴はお前外について吸えっていうふうになったり、こじや吸っちゃ困るっていうふうになっちゃうようになってるわけです。それでこれがもう少しアレスしますと、今度は嫌煙権が成立しますと、法律によって特定の場所以外で吸うことはならぬという法律ができるかもしれませんし、嫌煙権運動のひとはその法律をつくるまでやるかもしれませんし、そういうふうになつてくるわけです。それでその有力な支柱っていうのはたぶん、医学的にこれはおもしろくないという結果がちゃんと出てくる、これは疑いようがないっていうデータが出てくる、それでそれからまたほんとに嫌いな奴は今まで我慢してたけど、もうこうなったら我慢しないぞっていう、極限まで我慢がきたっていう、そういうことももちろん入っているかもしれません。つまりあのー、そういうことから嫌煙権みたいな運動は出てきたっていう、ポツポツとできているわけです。するとこの問題は、例えば嫌煙権運動っていう運動は、おのずから煙草の嫌いな奴が煙草の好きな奴を駆逐する、したい、するっていうようなそういう運動でありますけれども、そういう運動として理解したらそれで終わりかかっていうと、ぼくはそうでないような気がします。つまり嫌煙権運動のなかには非常に究極的な問題が含まれ

ているというふうを考えます。究極的な問題とは何かっていいいますと、つまり煙草を吸うってことは例えば麻薬を吸うとかそういうのも全部含めると、一種の、その何ていいますか、人間人類がなぜいつと初め麻薬を使って一時的な陶酔をしたらんだとか、煙草を吸って一時的な精神的解放をしたらこれをたしなむようになっちゃったのか、つまり人類のその、何ていいますか、みすみすあんまり体に利益があるとは誰も思っていないだけども、しかし人類は歴史的にそういう嗜好品っていいいますか、一時しのぎの精神的な嗜好品、酒も、まあ酒もたいしたことないけども酒も同じようだとすれば、人類のそういう嗜好品の歴史っていうのがあつたわけです。するとこの歴史が究極的に提起している問題は、要するに人間はなぜみすみす身体的には悪いってことはわかっているし、度を越すと非常に有害だっていうのもわかっているにも拘らずこれをたしなんで、それで一時的にせよ精神を解放するっていいいますか、ゆったりするっていうようなことをするのだから、するようになったらどうかっていう、つまり人類の歴史的な麻薬それからそういう陶酔物の嗜好の歴史っていいいますか、たしなむ歴史っていうものの総検討っていうのを強いられてるとぼくは理解します。つまりその総検討ができない限り、ぼくはこの嫌煙権と、いやそんなのないっていうのの争いはまず決着がつかないだろうと思えるのです。つまり、これは身体に悪いっていうデータがいくら出てきたって、身体に悪けりや人間はやめるか、あるいはみすみすこれが悪いってわかってたら人間はそれをやめるものかかっていたら、決してそうじゃないんです。つまり人間はそこはとも非合理的な存在であつて、合理的でない存在であつて、合理的でないことの一歩とって早い例がつまり、煙草を始めとする嗜好品・麻薬っていうものの歴史なんであつて、つまり人間がなぜこんなものをたしなむのか、これをたしなむと、たしなむとしまいに体がぼろぼろになっちゃうよっていうような、そういう麻薬とか、つまりそういうものでも人間はなぜやめないんだらうか、あるいはそのひとはなぜやめないんだらうかっていう問



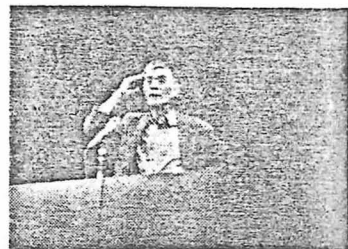
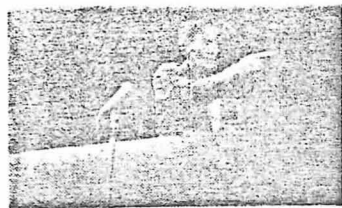
問題は、たぶん人間の嗜好品の歴史の総検討を強いるという問題がそこに含まれているわけだから、それに対する解答がない限り、ぼくは嫌煙権運動が成功するとか、これが席卷するということにはぼくはそうは思えないですし、またそういうふうには席卷したらかおかしんだというふうには思いません。つまり政治党派の問題として多数派になったから法律を制定してこれで成立したというふうだったら、それは究極の解決でも何でもないのであって、一時のぎにしかすぎないんで、本当はなぜ人間は嗜好品をたしなむのか、あるいは麻薬をたしなむのか、あるいはぼろぼろになるにも拘らずそれをやって一時しのぎの解決を求めるのかという問題は、これは人間の、何ていいますか、内的精神の問題から社会制度の問題にいたるまでの広汎な問題についての或る解答を用意しなければ、解決しないというふうには思われます。ですからそれはまあ一例にすぎないんですけれども、現在皆さんがよく注目して御覧になると、嫌煙権みたいな、煙草吸うか吸わないかみたいな、嫌煙権みたいな一見つまらなそうに見える問題で、しかし本当はよくよく考えてみると究極の問題を喚起してんだという問題がたくさんあると思います。たくさん目につけることができると思います。そしてそれらの問題のなかから、何が一時しのぎの問題か、何が政治党派の勢力の問題か、何がそうじゃなくて人類の究極の問題なのかという、そういうことについての或る解答を講別することがとても重要に思われます。これが講別されないで争われていることはたぶん党派の問題にすぎないのでたいしたことはないのです。つまり解決してもたいしたことはないのです。だからそうじゃなくて、そういうふうには喚起される問題のなかで究極的に喚起する部分はその部分だということをして、うんとよく講別するということが重要なような気がします。そのての問題は皆さんが注意して御覧になれば、幾つもポツリポツリと、いろんな分野で起こってきています。で、それはそれに気づくかどうか、あるいはそれを単に党派の問題として流してしまいかしないかということが、ぼくは問われていると

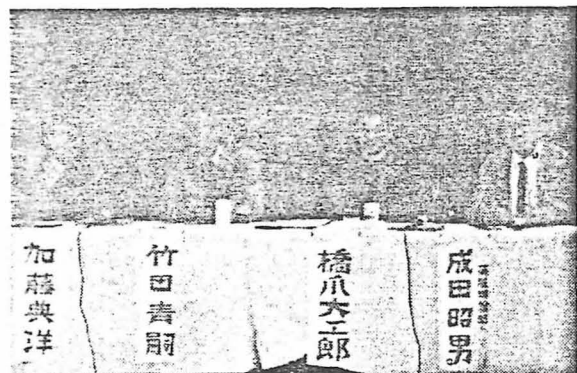
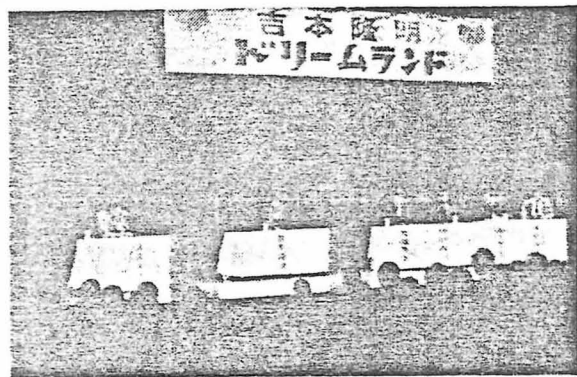
理解します。ですからそれはそのなかに一見つまらなそうに見える様な問題のなかに、相当究極的な問題が含まれてるということよな、そういう問題を講別するということとは、どうしてもドリーランドの条件のひとつとして要するような気がするんです。これはつまり、重要な問題とわかつている身障者の問題みたいなのをとってきてても同じことです。つまり煙草の問題じゃなくても身障者の問題みたいなものをもってきてもそうなんで、これはつまり福祉の問題でもなければ、その何ていいますか、同情の問題でもちろん何でもないですよ、またボランティアの問題でも何でもないことなんで、つまりそれらの問題は決して悪いことではないんですけれど、いいことなんですよ。しかしそれはちつとも究極の解決ではないのですよ。そうすると、身障者ってものが身障者でないものと同じ条件で同じように生活してんだだけでも、しかしそこには何らの区別もまた差別も、それから差別の意識すらもないというふうな状態が、どこからの助けも借りずに身障者自身の手でそれが成し遂げられたらという、これがたぶん究極のイメージだということに思います。しかしこれは、提起されているのは、これは福祉の問題であるとか予算が少なすぎるとか関心がなさすぎるとか、そういうような問題としてしか、あるいは差別だということよな、身障者を差別するとかそういう問題として考えられていますけれど、本当はそうではないです。この身障者の問題はたぶん人類が究極に、最後に解決する問題のひとつとして残るとぼく自身は考えています。だからそんなに簡単じゃないよという究極の問題がこのなかに含まれていると、ぼくは理解しています。これを現在の段階で、例えば身障者の問題を究極的なことと言っちゃおうとすれば、ぼくはきょう例えば婦りにそこらへんで自動車事故になって、それで手が一本なくなっちゃったって、明日から書けねえから食えねえぞという、何か書けないから食えないぞというふうになったと仮定します。そうした場合にはぼくが例えば、これから例えばぼくが死ぬまでいつかわかりませんが、死ぬまでの間の期間はぼくはもうすて

に働いちゃったという理解の仕方をして、それだけのものは、明日から手を折っちゃったら手がなくなっちゃたらもうその日から死ぬまでの何か、金は全部ちゃんと自分の手に入るというふうなふうにすれば、まず一時しのぎ、一時的ではありますけれど相当究極的な解決に近い状態が得られるわけです。だけど今そんなことを言ったら気遣いだと思われてしましますよ（会場笑）、つまり冗談じゃないって、お前勝手に不注意で交通事故になって手一本なくなっちゃった、何もそんなに保証するいわれはねえというふうには言われてしましますよ。しかしよくよく考えると、そんなふうには以外にない問題がそのなかに含まれていると思います。身障者の問題のなかに含まれていると思います。だからこの問題のなかに究極の問題っていろいろが含まれているとぼくは理解します。決して福祉の問題とか社会政策の問題とか、政府が変われば変わるとかそんなもんじゃない、そういう問題じゃない問題が含まれているというふうにはぼくは理解します。そのての講別はとても重要なことであって、これはもしかするとドリーランドってものを構想する場合にとっても重要な条件として残るんじゃないかというふうに、つまり考えられるんじゃないかというふうには思っています。例えば現在在り大きな問題のように考えられている反核とか原発とかっていうような問題は、ぼくの理解の仕方ではそんなに重要な問題じゃないと思います、ないというふうには理解しています。つまり今提起されているような提起のされ方だったらあんまり重要じゃない問題だということに考えます。でもほんとは嫌煙権なんて問題のなかに相当重要な問題、本質的な問題が含まれていると、あるいは究極にしか解決できない、つまり人類が最後にまで残さざるうっていう、解決を残さざるうっていう問題がそこには含まれています、嫌煙権の問題には、だけど反核の問題にはそんなもの含まれていません。米ソ両体制反対って、解けて言えればそれは済んでしまいうわけで、つまりこんなのはちつとも人類の究極の問題でも何でもないですから、そんなたいした問題ではありません、そういう

意味あいて言えはすよ。たいした問題ではないのです。でも例えば一見つまらなそうに見える嫌煙権の問題のなかに、ぼくは或る部分はとても重要で、それでこれの解決はたぶん人類が最後に残さざるうなあっていう問題が含まれていると理解します。それを講別する、それらの問題が至る所で噴火のように起こって誰で誰で目につくわけです。そうじゃなくて、わからないうちに、一見つまらなそうな形に至るところの分野で至る所にふつと起こってきています。つまりその問題のなから本質、あるいは究極の問題を講別するっていう認識っていうようなものがどうしてもつくられなくちゃいけないような気がぼくはします。

それであのー、その問題は、どうしてそのての問題が、究極の問題を含む問題が起こっているかについていいますと、大ざっぱなことを言ってしまうと、やっぱり現在の先進社会っていうものがたぶん何か知らないけれど、ゆきづまりと展開との、あるいは過密と膨張との両方を含みながら、或る、まあ何ていいますか、新しい新たなわからない段階にどこから少しづつ入りつつあることの徴候のようにぼく自身は理解しております。だからその徴候、そういうふうに入りつつある部分からたぶん映像が、あるいはイメージが、イメージのなかに究極の問題が含まれてくるみたいなことが起こってきているのではないかっていうのが、ぼくの大ざっぱな理解の仕方です。で、うーん、これ以上の何ていいますか、詳細っていいますか、詳しいことについていうのは、もしぼくの書いたものを読んでくださいばそれは書かれていますけれども、大体ぼくがどういう発想とどういう原則でもって何をしようとしているのかという問題の、その大ざっぱな筋道は時間のなかで、えーと、（主催者側からのメモを見ながら）半まで書いて書いてあるんですけど（会場笑）、時間のなかで大体大筋を申し上げられたらというふうには思っています。あのー、これで一応終わらせていただきます。



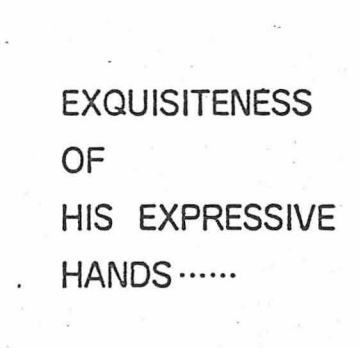
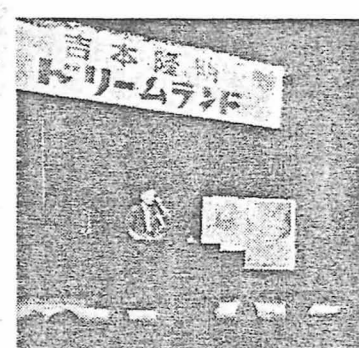
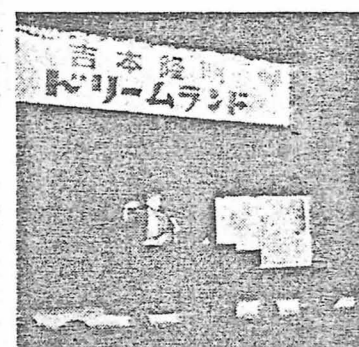
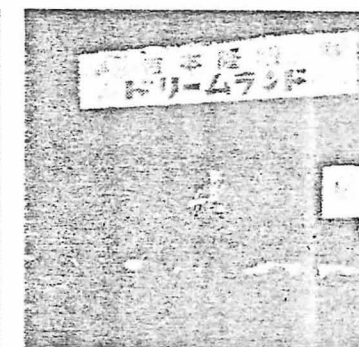
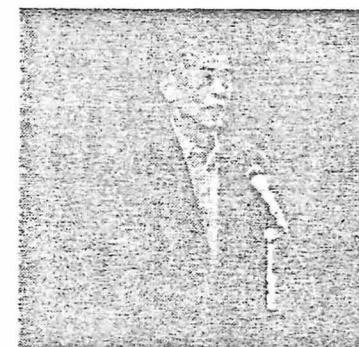
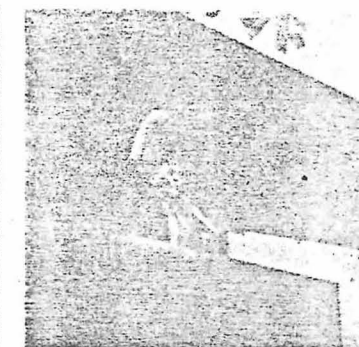
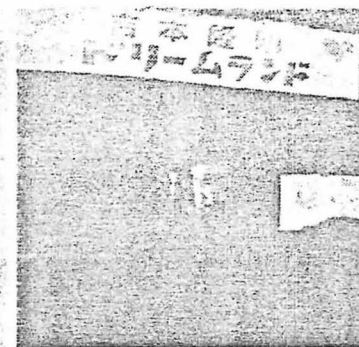


フリートーク

吉本隆明 加藤典洋 竹田青嗣 橋爪大三郎
成田昭男 小浜逸郎 北川透 ほか



Welcome back to the flower garden of intelligence. We can expect more challenging and serene time and tide. That's the symposium of four critics representing Japanese literature. And it is incredible to come across these four guys, nay guys. Fine. We just starting it.



EXQUISITENESS
OF
HIS EXPRESSIVE
HANDS.....



司会 こんにちは。きょうは盛大なお客様でどうもありがとうございます。えー、これから第三部のフリートークというものを始めます。第三部の司会をやります瀬尾と申します。よろしくお願います。えーとまあ、あれこれ裏方を忙しく駆け回っていたところ、いろいろこう、司会をやるうと思つて考へていたのを全部忘れてしまったので、何を言つたらよいかわからないんですけども。あのー、この菊屋まつりをあのー、四回目ですけれども今年やろうということとて吉本さんと呼ばうということ、あのー、八月の末にお宅に伺つて、こうこうこういうことで吉本さんを中心にして、あと若手のゲストを加藤さん、竹田さん、橋爪さんなんていう方を呼んでやろうというそういう企画と、それからまあテーマなんかを申し上げたところ、吉本さんがおっしゃるには、菊屋ともあるうものがそんな真面目な企画をしてもいいのかつていう、そういうお話だったんですけども、別にそのー、菊屋はさっき「ひょうきん族」じゃないかつていうまあおほめの言葉をいただいたわけてですけども、そうでもなくて、もともと相当真面目な雑誌ですつとやっております、きょうもまあ相当にハードな真面目な企画で、第三部もあのー、超真面目な、難解な討論ができるだらうと思つております。それで、ゲストの方々をひとりずつお呼びしたいと思います。紹介を簡単にさせていただきます。まず最初に加藤典洋さんの紹介をします。えーあのー、現在加藤さんを皆さん御存知だと思ひますけれども、若手で最も注目されてる批評家ということになってはいますけれども、ほかたちが学生だった頃、加藤さんも学生だった頃は、あのー実は、あのー、まあ限られた範囲ではあるけれども非常に熱狂的なファンをもつ彼は小説家でした。で、あのー、昔の友だちが会うと、あの頃に加藤典洋の小説はすばらしかったというような話ができるくらい、まあ一時代を風靡したつていうか、そういう知るひとぞ知る小説家だったわけです。で、それから勤めの関係で一九七八年から離れたけれどもカナダへ渡つて、そこで四年程生活して、八二年に日本へ戻つてきました、その後は現在我々が知っているような批評の

方の活動を始めたということです。で、あのー、著作には『アメリカの影』というのが去年の春くらいでしたか、てました。日本の戦後史つていうのを全く新しい角度でとらえ直したという、若手で注目された批評であるわけです。で、あと近著としては近いうち弓立社、まあこれは一年程前からであるという予告があつて今だにないという、まだ当分でないんじゃないかという噂もあります。『批評へ』という批評集がでることになっています。吉本さんとの関わりていいますと、何か昔『言語にとつて美とは何か』について百枚二百枚という論文を書いたという記憶が、それで何かカナダに渡るときに全部紛失してしまつたというそういうエピソードがあつて、最近では『群像』に、吉本・埴谷論争とかいうのがありまして、それについての『還相と自同律の不快』という文章があります。それじゃ、盛大な拍手でお迎へください。加藤典洋さんです。



Like everybody else, he also has had an ambition to put the post war era in his own perspective and with a view to experience what it is he went to Canada and sent one book in dubio, that's Shadow of America. I am expecting his eloquence of speech. Mr. Taro Kato

司会 続きまして二人目のゲストの方です。竹田青嗣さんの御紹介。えーと、竹田さんは現在加藤さんと並び称せられるといひますか、若手で最も注目を集めてる批評家、ということになってはいますけど、一説には歌手んじゃないかという話もありまして、まあ知るひとぞ知る、井上陽水の歌を歌わせるとこのひとの右にでるひとは井上陽水本人しかいない、というくらい的美声の持ち主なんだそうです。まだ聞いたことないんですけども、今晚あたり聞けるのではないかと期待をしています。それで、文芸批評のほかに西洋思想史の方のエキスパートでもあつて、そのほうの著作もあります。結局西洋思想史なんていうと、デリダだとかドゥルーズだとか何とかいつてぼくらの頭ではどうもあんまりよくわからないつていうのを、大体ぼくたちの頭にわかるような可能な形で、ぼくらの体験に適應

Theme for Mr. Norihro Kato
AMERICA by Simon & Garfunkel
"Let us be lovers
We'll marry our fortunes together
I've got some real estate
Here in my bag"
So we bought a pack of cigarettes
And Mrs. Wagner's pies
And walked off
To look for Amerika

可能な形で書いてくださっている方です。えー、著書には、在日朝鮮人作家を扱った『在日』という根拠、それから御存知「湯水の快楽」、それから最近の「意味とエロス」などがあります。吉本さんとの関わりがいますと、JIOCですね、「宝島」のタイトルで「現代思想入門」なんかで吉本さんについての文章がたくさんあります。それから吉本さんの対談集「不断革命の時代」のなかに吉本さんとの対談があります。で、最近「文芸」で、「世界という背理——小林秀雄と吉本隆明」という連載をされています。じゃ、登場していただきます。竹田青嗣さん。



His sweet voice should be heard to sing Yosui Inoue. He must be remembered as a critic who succeeded in putting special privilege to Edmund Husserl. He is the one to be kept our eyes on from now on. Mr. Seiji Takeda!

Theme for Mr. Seiji Takeda
飾りじゃないの涙は by Yosui Inoue
私は泣いたことがない
あかりの消えた街角で
速い車にのっけられても
急にスピンかけられても怖くなかった
赤いスカーフが揺れるのを
不思議な気持ちで見てたけど
私泣いたりするのはちがうと感じてた

司会 それでは三人目のゲストの方です。橋爪大三郎さんで、前の二人の方は一応文芸批評家ということになってるんですが、橋爪さんの場合は学者といますか、在野の社会学者ということになってます。あー、学生時代は俳優をやっていました、今では伝説的存在になってる芥正彦の劇団駒場というところで俳優をやっていた路上でわけのわからないことを叫んで走り回ってたということがあるんですけども、で、あー、もう十年このかたになりますけれども『記号空間論』という壮大な構想をもった、言語論から数学理論まで包括した社会理論という何かよくわけのわからないものですが、そういうものを構想して、あーこれもあるひとぞ知る、公表しないもんですから知るひとぞ知るんですけども、水面下で膨大な構想をもった理論を展開して、去年ですけれども勁草書房から『言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』これ、彼の理論のほんの何となく波頭がちょっと見えただじやないかという程度のアレなんですけども、それができました。で近いうち「仏教の言説戦略」が同じ勁草書房から近著があるみたい

です。それで吉本さんとの関わりがいますと、その『記号空間論』のなかにいる吉本さんに触れた文章というのがあるわけですけども、そのほかに御存知の方もあられませんけれども、レヴィ・ストロースの『親族の構造』というのがまだ翻訳されてなごきに、彼が自分で翻訳したのを持っていて、吉本さんが家族論・親族論なんかを展開されているときに、その自分の試訳を提供して初めて吉本さんにそのレヴィ・ストロースの『親族の構造』を読ませたと、まあそういう因縁があるのです。では登場していただきます、橋爪大三郎さん。

He is said to lead very stoical life to finish his unique sign-space theory. I have a personal favor on his first book to the effect that world is a splendid game. I now remember my senior friends' words that life is a funny game aimed to get girls. Now Mr. Daisaburo Hashizume!

Theme for Mr. Daisaburo Hashizume
おもちやのチャチャチャ by Nosaka & Koshibe AKIKO YANO
おもちやのチャチャチャ おもちやのチャチャチャ
チャチャチャおもちやのチャチャチャ
空にきらきからお星様
みんなすやすやねあむるころ
おもちやは箱をとびだして
おどるおもちやのチャチャチャ



司会 以上でゲストの説明が終わったかというところ、まだもうひとりおられます、えー、あとひとりゲストの三人と並んでいたたく、あそこに「菊屋理論部おじさん課」って書いてありますが、ああいう理論部っていうのはひとりしかおりませんので、彼ひとりなんですけれども、菊屋を代表してどうか何となく、菊屋きっての理論家の成田昭男さんに登場していただきますが、まあ彼は菊屋きっての「理論家」であるので、菊屋の理論的な水準の高さも低さも全部彼の責任になっていることとありまして、昔は自分で雑誌やっつけて『鮎川信夫論』っていうのを書いていました。あー、鮎川さん、きょうの朝、亡くなったっていう話を聞いたもんで、ちょっと落ちこんでいるのでありますが、まあ、その分、ちょっとあー、BGMがちよっとアしなんです、あー、最近では『菊屋』誌上に『ネハン詩論宣言』というのを書いてあります。何を宣言してるのかさっぱりわからないという……それは中部山岳地帯の代表、成田昭男さん、ごっぞ。

Theme for Mr. Akio Narita
釜山港へ帰れ by チョー・ヨンピル
嬉さく暮なのに
あなたは帰らない
たたずむ釜山港に
涙の雨が降る
熱いその胸に顔をうずめて
もう一度幸福かみしめたいのに



司会 彼はちょっとでたがりの傾向があるので、紹介が全然終わらないうちに帰ってしまうという、たぶんBGMまで聞かせてしまおうという——

成田 カラオケ大会じゃなかったですか、きょうは。

司会 あ、いやいやいや。あのそれは夜やりますのでよろしくお願ひします。えーそれで、最後に吉本さんに加わっていただきますが吉本さんについての紹介は省略させていただきます、本名で吉本隆明さんと呼びすると何か別人を呼んでるみたいですので、いつも呼んでるとおりに紹介します。吉本隆明さんです。



Also Mr. Takaki, any introduction to you.
Here comes Mr. Umehar Yoshimoto!

司会 それではあのー、何というか、何をやらしたいのかさっぱりわからなくなりましたのですが(成田笑)、きょうはせっかく菊屋まつりに吉本さん来ていただいたので、まああの、ひょうきん族かどうか知らないですけど、あのー要するに、日頃語られたことのない吉本隆明を語り、かつ語らせようということをやりたいわけです。で、ほくもあのー、司会やるんだからちょっと勉強しようというふうに思っただけで、いろいろ忙しかったし、まああの何なのか、語られたことのない吉本さんを語ろうっていうのに勉強しても仕様がいないんじゃないかっていうんで、何もやってこ

なかったんで、頭真っ白なんですけど、で、あのー、大体ゲストの皆さんにも何も考えてこないでくださいってあらかじめ連絡してあって、吉本さんのお話を聞いて、ぶっつけ本番でなるべく喋ってくださってというふうに言っておきましたんで、一部成田さんなんかは随分勉強なされた(会場笑)らしいですけども、まあ大抵そういう成果というのは空回りするだけなので、そのほうはまあ大丈夫なんじゃないかって、でも何かさっきゲストのひとを見ていたら、何かいろいろメモか何かあって、ほくなんか結構こんなにメモがあるわけですが、これでも準備していないわけですけど、で、あの、形としてはまずゲストの方にいろいろ喋っていただいて、まあ十分くらいでいいじゃないかという感じで最初喋っていただいて、それでまあ吉本さんに答えていただいて。それで順次会場の方にもマイクを回しますので、ゾクゾクと楽しみにお待ちいただきたいと、そういうことです。それじゃ、まあ何というか、あのー、一応ですね、会場の方にもお願いしときたいんですけど、こういうふうには吉本さんをお呼びすると、いつもこういう質疑応答になると、何かあの、二十年前の怨念がどうのこうのと(会場笑)、恨みつらみを言ったりとか、ちょっと人生相談みたいなことをやってみたり(会場笑)とか、そういうのがあるので、いいんですけど、そういうのはいいけど、やっぱり一応テーマは『イメージの世界都市』というふうになっているので、それに絡めて、それに関係する形で人生相談でも何でもやっていただければ——。それじゃ、トップバッターということ、あのー、今のお話に関する感想なんか絡めて、じゃ加藤さんのほうからひとこと、お願いします。

加藤 加藤です。あのー、実はきょう東京駅で吉本さんと偶然お会いして、ここに来るまで一時間程お話ししてきましたけども、何かまずあんまり何も考えなくてもいいっていうんで、何も考えてこなかったところにもってきて、あのー、二日前に電話、あのー、何も考えていないだろうって電話を(会場笑)もらったんですけど

Like Mr. Yoshino, I'd like to introduce you. This year we also invited the choice poet Mr. Takaki. He has especially been diligent to be called OZISAN and Rural Artist. If comparison with Mr. Yoshino, Japan Professional. With his performance, I can't tell whether he will be the first or the last. Anyway, we welcome Mr. Akio Nakai!

Theme for Mr. Takaki Yoshimoto
いけないルーシユマツク by Kiyoshiro Imawano

きみがいなけりや
夜はくらい
響の囁きの中も
とてくくらい
Baby, oh, Baby
いけないルーシユマツク
Baby, oh, Baby
いけないルーシユマツク

ども、考えていないって言ったなら、なあに、ひとつふたつ考えてくれればいいんですけど、そのほのめかされて、ちょっとキョッとして、慌てて考えようとしたようなことは全部新幹線のなかで吉本さんに言っちゃったような気がするんです(会場笑)。きょうのお話は今『海燕』っていう雑誌に連載されている『ハイ・イメージ論』で吉本さんが展開されているものについて、それを踏まえたお話だったと思うんですけども、その『ハイ・イメージ論』っていうのは今まで何度か『海燕』っていう雑誌で見ると、『世界視線』とか『究極映像』とかいう言葉がでてくるものだから、ちょっとこれはまあ本になったら読もうかなんて思って、どうもつつきにくいんで、まあ、恐らく最初からまとめて読んだら読めるだろうなんて思っていたところ、機会があって、ちょうど三週間くらい前ですね、全部、まあほぼ全部今までのぶん読む機会があって読んだら、ほくには非常におもしろかったんですね。『マス・イメージ論』もその前に機会があって、一年くらいおいてもう一回読んでみました。これは一年前も読んでおもしろかったんですけども、だいぶわかないところもあつたんですね。で、二回目読んだらだいぶわかりやすくなってるんで、何でわかりやすくなっているんだろうと——、えーと、これ、何分まで喋ればいいんですか。

司会 あの、大体十分くらいでいいんじゃないかと。

加藤 じゃ、あと五分くらいまで。

司会 ええ、もう五分くらい済みましたから。

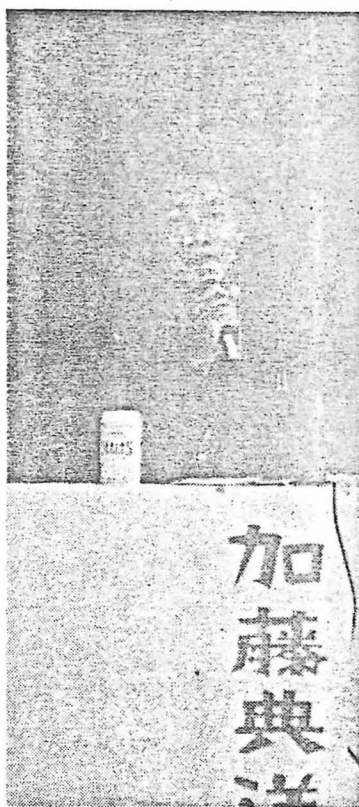
加藤 えーと、何とか五分もう終わりましたけども。それで、今回読んだらとにかく『マス・イメージ論』がだいぶおもしろく、読みやすくなつたんですね。そのことであのー、ちょっとおもしろいなと思つたのは、あのー、前にわかんなかったところがわかるって

いうんじゃなくて、あのー、あまりその、まあ競争、五千メートル競争でいうと、トップランナーのあたりがわかるんじゃなくて、まんなから尻っぱあたりのところがわかるっていう感じ、馴染みやすくなっただけですね。あそこ最初だされた考え方っていうの、なかなかわかりにくかったようなものが、知らないうちにね、わかりやすくなってるなっていうのが、ぼくには不思議な手ざわりで残ったんですけれども。それでこれはどういふことかなと思っただけで、いつのまにかぼくたちは『マス・イメージ論』の特殊な用語に慣れちゃってるし、慣らされちゃってる、その力というかスピード、速やかに驚いたんです。それにはどういふ意味があるんだろう、ということですね。ひとつは吉本さんの言ってることの力、てしやうね、もうひとつはこういう日々新たな領域でのコトバに対する感覚の、ぼくたちの抵抗力の無力なこともないかな、なんてことを思いました。

それであ、二箇所だけぼくわかんないところありましたけど、五行くらい、やっぱり『マス・イメージ論』一年たってもう一度読んでみて、そんなことを考えて、えーと、今度の『ハイ・イメージ論』を読んだわけです。この『ハイ・イメージ論』というのは、あのー、最初の入り口が非常に独特になっている、入り口に門があるんですね、て、その門にどういふ言葉が書いてあるかはわからないんですけども、とにかくその門を入れば、非常におもしろいんです。ぼくはあのー、ですから何か、あのまあ、ひとつは「国家論から都市論へ」っていう言葉を思いついたんですけれども、その場合、昔も六十年代の末くらいに都市論っていうのが一時話題にできて、今あのー、日本論、日本人論とか国際化論とか片っぱうにあって、て、片っぱうに東京論っていうのがね、また、風俗的にすけども盛んになってますね。で、あのー、非常に軽薄なものもあって、けしからんなどという見方もあるかもしれないんですけども、東京論っていうのは要するに都市論なんですね。で、東京論っていうのがあんなにでてくるところには、何かのアニメ、ペンヤミンのいうオーラ

ひとつのベクトルがふたつの分力に分解できるっていうか、あのー、こういう矢印が縦と横、X軸とY軸でもいいてすけども、一メートル五十くらい目の高さ、あとどこからか垂直に降りてくるシャワーのような視線に分かれる。そこで、まあ、ぼくなんか近頃何か考えてきたようなことに、そのー、見合うようなね、ことをもつと構造的に言われてるような気がして、ぼくは非常におもしろかったんですけれども。それは何でおもしろかったかっていうのはちょっと時間もないし、ここでは今言いませんけども、あのー、そういうふたつの力の合成の逆ですね、ふたつに分けた形で世界線っていうのを取りだされてる。つまり元気がよかったらイメージとしてひとつの力なんですけども、死にかかったり機械が壊れかかったりするときに分かれる、分かれた片われとして世界線っていうのを取りだされてる。だから「死滅した目」と違うのは、死にかかっていることに現実的な根拠みたいなのがあって、そこから世界線というのがでてるような、そのへんのところを、この八十年前以降の世界史の中心の構造的な変化っていうふうなことに関係してすね、そういうふうな世界線ってものをそういうふうな形で取りだしてこられた。ぼくから見ると、そこにいまの「国家論から都市論へ」という動きの根拠がいちばんよく掴まえてるということなんです。『世界線』というのは、そういう意味では非常にダイナミックで魅力的なアイデアだということですね。いちばん小さなことから、もう分裂しようのないアトムですね、それが壊れるときにすごいエネルギーがでるわけですが、世界線っていうのは、かけらが割れて生まれたエネルギーなんじゃないかな、ということなんです。ことによるとこれは正確な読みじゃなくて、いまの吉本さんのお話の聴き取りとしては誤読かもしれないんですけども、ぼくにはその誤読的部分がいちばん面白く思えました。

司会 それじゃもうひとり続けてお願いします。竹田さん、じゃ、お願いします。



ですね、アニメ、何かのまあオーラっていうか何か働いていると思う。それには根拠があるだろう、必然性があるだろうという考えなんです。で、『共同幻想論』と『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』っていうのを並べてみると、その、柳田国男が『遠野物語』からやっぱり二十年前くらいして『明治大正史世相篇』っていうのを書いてるんですけども、あ、これは吉本さんの一種の『明治大正史世相篇』に当たるような、つまりそこにもね、国家論から、じゃないてすけども、共同体論から都市論へ、或る全体を構想するところから、かけらと全体との関係を構想するような具合に変わってきてるってふうな感じを受けて、面白いな、これは何だろうって思っただけです。

まああのー、ぼく今さっき吉本さんのお話聞きながら勤勉にもー、ていうか何かとってたにもかかわらず、ほとんどここに出る前から何も考え全然まともなくて困ってるんですけども、あのー、ちょうど今さっき話でいいますと、世界線っていうのがぼくには非常におもしろかったってことなんです。世界線っていうのが、例えば塩谷雄高さんてひとは「死滅した目」ってのを以前言われたことがあるんですが、それと違うんですね、全く。似てますけども全く違う。で、あのー、さっきのお話の例、死にかかっているひとの例でいうと、意識が減退して要するに機械が壊れると、

竹田 竹田です。あのー、テレビなんか見ていると、あのー、落語家のひとが並んで、三題噺というのをやって、出題するひとがいてね、それで即興でやるわけですよ。ぼくらそういう訓練全然積んでないんで、三人共さっき控え室のなかで非常にプレッシャーが(笑)かかって、吉本さんの講演を三十分ばかり聞いて何か話をしるっていうふうな言われたんですけど、あのー、大変困ってるんですけども。えーと、ぼくこの頃ファミコン・ゲームにすごく凝ってるんですよ。で、相当もう、えーと、六つくらい最後の最後までいっちゃって、あのー、高橋名人に今度挑戦してみようかなんて思ってるんですけど。あのー、きょうの話でぼくも大変刺激を受けたんですけど、ファミコンってのは一種世界線みたいなところがあるんで、旅行を結構若いときから、時間があったらぶらぶらしてたもんでいるんな所へ行くんですけども、最近思うのは、日本じゅうどこ行っても同じ風景になってるっていうのがあって、そうすると、昔は旅行っていうのはすごくおもしろかったんですけども、もうどこでも似たような風景しかでてこない。そうすると、すぐ近くの伊豆に行っても秋田に行っても何かどこか似てるなっていう感じがあって、そうすると世界っていうのは面白くないわけですよ。ところが、ファミコンっていうのはなかなか、コンピューターゲームなんですけどもおもしろいところがあって、えー、シミュレーションでまあいろんな像をつくるわけですよ。で、あの像っていうのは風景、日本の風景と違って想像しているんなものをつくるわけですから、相当違う世界をどんどんつくっていく。で、しかもあの、そこで探検するなりお姫さまを助けたりとか、それから宝の箱を探したりとかいろいろやってどんどん進んでいくわけですよ。で、なぜかぼくはああいうのすごく凝っちゃって、今凝ってるのは任天堂のバレーボールというやつなんですけども。昔、テニスゲームというのがあって、それはあの、何ていうのかな、玉がどこにきたかというのと、それを打ち返すタイミングが難しいんですけども、あの、一晩じゅう



やってるんですよ。次の日原稿があるにも拘らず、夜ごはんを食べ
てから朝の十一時くらいまでやってる(笑)なんてことが何回も
ありまして、あのー、すぐに上達するんですけども、その任天堂の
バレーボールというのは相当複雑なんですよね。で、いっぺん、こ
んなものはコンピュータに勝てないようにできてると放りだした
んですけど、やっぱりやってみると相当複雑でだんだん進んでいく
で、これは世界の構造に似てくるなっていうふうにはぼくは思っ
まして、つまり、先の場面へ行きたいんですけども、或る課題を克
服しないとその先の場面というのが見えてこないわけですよ。で
あまりにも困難すぎると駄目なんですけども、ちょうどこう努力を
すれば行けるといふことになると、どうしても先の場面が見たくな
る。編集者のひとに怒られても、どうしても(笑)きょうじゅうに
次の場面に行きたいという欲望が胸の奥からどんどん深まってきま
して、つい向かっちゃう。それと人間が世界を経験していくって
いふふうな感触っていうのは、非常に似ているところがあるな、欲望
と世界の構造も非常に似るところがあるなっていうふうなことを思っ
てまして、ただひとつだけ違うところがあるんですけども、突然
難しい話になるんですけど、フッサールというひとがいまして、こ
のひとは簡単に言いますと、それまでは人間の認識と世界の現実っ
ていふものが対立していて、世界の現実を人間の認識はどういうふ

うにとらえるかっていうふうには考えられていたんですけども、そうい
う対立は全然ないんだと、全部世界像なんだっていうふうなことを
非常にもしるいい方で、まあ、そういうことを言ったひとはい
ろいろいるんですけど、ぼくの考えではフッサールというひとが一
番はつきり最後の最後まで言ってる。つまりこれは究極の世界像理
論だっていうふうには、ぼくなんか思ってるんですけども。あのー、
フッサールというひとはそういうことを考えたわけですよ。とこ
ろがフッサールのあとにハイデッガーというひとがでてきてまして、
またちょっと違うことを言う、フッサールの方法をそのまま使って
違うことを言ってるわけですよ。で、ぼくは最近あのー、実存転向主
義者とかいろいろ言われてるんですけども(笑)、実存という考え
方をハイデッガーがだしてきたんですよ。で、この考え方ってい
うのは、さっきのファミコンのゲームのことですと、まあさ
っき言いましたように世界っていうのは先が見えない、見えないん
だけども一定の手続きを踏んでいくと、まあ少しづつ向こう側が
見えてくる。そこへ行きたいという欲望がこつち側にたけりたつと
いうふうな、そういう構造になってるんですけども、ファミコンの
世界ではどうしても人間が生きている欲望と世界との関係に対応で
きないものがあるわけですよ。それは何かって考えますと、まあ
たぶん死、死ぬってことの死っていう問題じゃないかってふうには、
ハイデッガーというひとは考えたと思うんですよ。というのは、スー
パーマリオブラザーズっていうのがあります、知っているひとと
あると思えますけど、びよんびよん飛び石を跳んでいくわけですよ
ね。で、かなりいい線までいって、もうちょっといけば次の画面に
届くんだけれど、びゅつと落ちるとまた元の場面まで戻んなき
やいけない。そうすると、やっていると何かもう手に汗握って、崖か
ら落ちると、自分が崖から落ちて死ぬような切羽詰まった感触
になるんですけども、あのー、ただファミコン・ゲームでは失敗
したらもういっぺんやり始められるわけですよ。ところが、人間
の世界の関係ってのは死んだらそこで終わり、どうしてもやり直し

がきかないっていうふうなそういう項、そういう項目っていうのが
入ってるわけですよ。で、そういう項目が入ることによって、世界像
と欲望の関係っていうのは、ファミコンのなかに世界の世界像を見て
る、経験するっていうことと全然違った質を導くはずだっていうふう
なことを、ハイデッガーというひとは考えたと思うんですよ。で、
それがまあ、ハイデッガーの実存という概念で、もうちょっと言
ますと、つまり世界像っていうのは、人間の頭のなかにある世界像
っていうのはいろいろんな形をとります。で、それはひとつの考え方を
どんどんつき詰めていってどういう世界像の形をとりますかってい
うのは、どんどん押し広げて考えていけるんですけども、そのなかだ
けでは実存という問題はでてこない。実存ってのは、取り返しがき
かない、あるいは死んじゃったらもうゲームは続けられないって
いふふうな項目であって、それは人間だけが持っている。で、そう
いふ問題を導入してきたときに初めて人間と世界像の関係っていうの
は、またフッサールが言ったような関係ではなくて、ちょっと違っ
た形で見えてくる。ぼくなんかさっき吉本さんの話を聞いてて非常
におもしろかったのは、あのー、吉本さんは、えーとこれはぼくの
我田引水的な理解ですけども、ぼくはひそかに自分が思ってること
というのは今までの思想の脈絡からいえば違ったことをやってるんじ
やないかっていうふうには思ってたんですけど、吉本さんはもうそう
いうことほとんど射程のなかに入れて考えられてるなっていうふう
な気を強くしたんですけども。人間の視線には水平の高さからの立
体像と真上からの視線があるっていうふうなことあって、それで世
界像というものの全部いけば極限までおしていけるんじゃないかって
いう考え方があって、非常に刺激を受けたんですけども。あのー、
ぼくなんか思うのは、実存の視線ってのは、いわば下から見上げて
るような人間のもうひとつの視線っていうのがあって、これは映像
いわゆる機械的な映像、シミュレーションとしての世界っていうふ
うなものにはどうしても再現できない。いくらコンピュータやそ
ういうものが進んでも、その視線っていうのはちょっと独特のもの

である。で、しかもその視線っていうのはやっぱりぼくらがあの、
たぶんこれから人間が世界を理解してゆくときに、吉本さんが言わ
れたような、世界像としてあるいろいろな要素を極限化してゆく、そ
れで全部範囲をつくっちゃうっていうふうな考え方がどんどん進む
と思ってるんですけども、そのときにそれをまあ、一種そういう視線を
解体するっていうか、吉本さんが(へ脱)という言い方で言われたわ
けなんですけども、あの、これも我田引水的に言うんですけども、
そういう視線があるとしたら何かさっき言った死っていうふうなもの
がどうしても関わるんじゃないだろうか。ぼくはもうひとつ、
死っていうことっていうのはただ単にやり直しがきかないっていう
だけではなくて、どうしてもやり直しがきかないっていうふうなこ
とになるとね、逆に対立として、これができたらもう世界と自分の
命とを引き換えにしてもいいっていうふうな、そういう項もでてく
ると思うわけですよ。で、あの、そういう人間の存在の視線って
いうのは、やっぱりシミュレーションのなかでの世界像だけでは考
えられない。あのー、まあそんなことを漠然と考えてました。それ
をまあ、死っていうものを超越っていうふうな形で考えてきたん
ですけども、そこらへんでこう、えー、何か時間がどのくらいたっ
たかわからないんですけども、あの、きょう吉本さんが言われてるこ
とに非常に刺激を受けて、またいろいろ新たに考え直してみようか
なって思ってるんですよ。どうも。

司会 どうもありがとうございます。今二人の方からお話をいた
だいたので、ちょっとここで吉本さんに話していただくかなと思
うんですけど、ぼくは、司会者は結構真面目に聞いているようで、メ
モなんか結構とってるから理解するように見えるけど、さっぱり
わからなかったもんですから(会場笑)、加藤さんの話でもやっぱ
り世界視線っていうのが非常に興味をひく部分だっていう話で、
竹田さんのほうでも、ファミコン・ゲームのほうから入ってフッサ
ール、ハイデッガーを通してやはり世界視線というところに入った

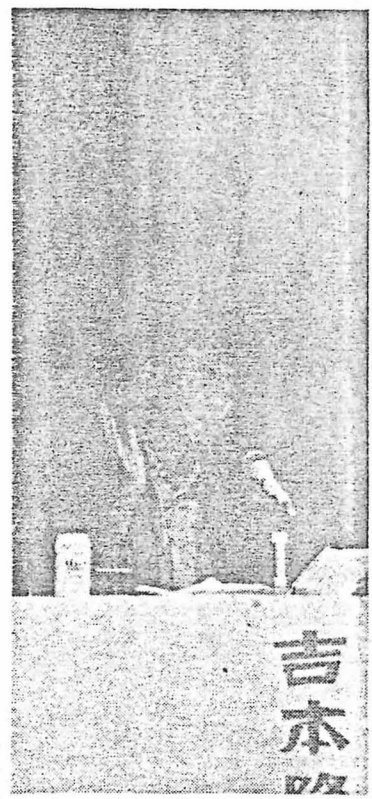
んでないかという、何かよくわかりませんが、で、そのあたりで、ぼくがさつき吉本さんのお話を聞いてた限りでは、世界視線っていうのにちよつと新しいこと言われたんじゃないかなって思ったのは、「権力視線」っていう言葉を使われたのが印象的だったんで、あのー、世界視線は権力視線でもありうるんだって言われた。で、それたぶん竹田さんとの対談のなかで、吉本さんは自分の世界認識の仕方っていうのはバースアイっていうか、鳥の目から俯瞰するようなそういう視線をとる傾向があつて、それはひよつとすると権力的な視線に転化する可能性があるんじゃないかかっていうふうになつて、ひとこと言つてらっしゃるところがあつて、そういうところと絡めてちよつとぼくは興味があつたもんですから、加藤さんの世界視線ということ、それからあの、そういうことと絡めてちよつと吉本さんのほうからひとことお願いします。

吉本 あのー、確かに竹田さんとの対談のところ、つまりぼくはわりに上のほうから何か全体をかぶせるみたいな思考方法つての、これは何かマルクス主義の悪しき影響のような気がするけど、それをわりと得意なんだけど、ほんとあまり好きじゃないんだって、否定したいんだみたいなことを確かそのときぼくは言つたんじゃないかと思つてます。だけれども、上からつていうことも、つまりきょうの言葉でいえば「究極」なんてすけれども、或る人間的な高さつていいますか、到達点以上の高さまで行つちゃえば、つまり無限遠点からの上からの鳥瞰視線といましようか、バースアイまで行つちゃえばそれは逆に権力を無化する視線つていうふうになりうるんだつていうふうと思つてる、みたいなことをそのとき申し上げたと思つてますし、きょうもそういうふうに申し上げたと思つてます。つまり現在の世界権力つていうのは、数十万キロの上空のところまで戦いを演じてるつて感じなんで、まあ無限遠点とはほど遠いわけですから、それはまたそれを無化する、無限遠点からの視線つていうのは無化する視線でもありうるんじゃないかと思つてます、みたいな

いつけなくなつちゃつて、やつてもこれは駄目だつていう、で、まあ手を挙げちゃつたというのがぼくなんかの経験なわけ。だから今の高度な、しかもファミコンの形で流布されてるつていいですか、はやつてるものがどういふうな程度で、我々がやつてどの程度くつていけるのかなつていうのはよくわかんないんですけど、或るところからゲームセンター通いもやめてしまった(会場笑)つていう(笑)状態なんで、またチャンスを見つけてせいじゃ(会場笑)竹田さんが今苦しんでいるところをやつぱり(笑)苦しんでみたいというふうに思つてますけど、今のところはまあそんなところすけどね。

司会 はい、どうもありがとうございます。そういうようなわけです、えーと、あと二人の方に続けていただきますが、やつぱりずれみたいのがあつた方がいいんじゃないかと思つて、普通は加藤さん竹田さんといくと、次は橋爪さんというふうになると誰もが思つてますが(会場笑)、ちよつとそこで成田さんをお願いしたいと思います。

成田 さつきからいつ指名されるか待つてたんですけど、この一週間ばかりきょうのために学習してまいりまして(会場笑)、えー、その成果がこの手帳にびっしり(会場笑)書きこまれておりまして、きょう吉本さんの前で御報告できるというのが(会場笑)非常に幸せなんですけど。えー、普通菊屋で理論的なことをやるつてなると北川透さんとか角谷道仁さんとかつてなるんですけど、どういふわけかわたくしがここに座つたらどうかということになりまして、えー、そういえばわたくしは菊屋では正式に学術担当というのを致しております。これはほんとの話なんです。で、大体狙いが若手の論者つていうことになつていけるわけ、若手の論者つていつたつて今皆四十前後のひとばつかなんですけど、そうしますとぼくもその世代つていいますか、同じ一九四七年生まれですから同じ世



ことを確かそのとき申し上げたんじゃないかなあつていうふうに思つていけるわけです。だからあのー、自分の方法つていいますか、方法を崩していく行き方つていうのがあつて、その崩し方をどういふふうに崩すかつていうことになつたら、極端に言えばそのー、竹田さんの言われたように下からの視線つていうふうには、全部下からの視線にしちゃえつていふふうな崩し方も勿論あるわけすけども、上からの視線を、何ていいますかね、現在の権力視線みたいなものよりもつと無限遠点においちゃえば、これはひとつ崩すやり方でもありうるんだつていうふうにはよく自身は考へていけるわけです。だからどちらからでも可能なんじゃないかなあつていうふうには、ぼく自身が思つていけるつていうのが現状なんですけどね。

司会 あの、ファミコン・ゲームなんかに関してはいかがでしょうか。

吉本 ぼくはあのー、やつたことない(会場笑)んですけども、あのーつまり、この頃は(笑)高度になつちゃつたんですけどね。ぼくなんかゲームセンターみたいなに行つてたときにはもつと程度が低いといましようか、単純なアレだつたもんですからまだやれたんですけども、ちよつと或る時期からそういうのがぼくらには追

代に入るわけ、まあ団塊の世代ということになるわけ、これはあのー、全共闘世代とかつて、まあそういうこと言つて頑張つてらつしやる予備校の先生もいらつしやいましたけど、まあそうなるわけです。で、きょう吉本さんの話を聞いてわたくしが思つたのは、やつぱり吉本さんは超空想的社会主義者だなつていう感じをもちました。これは鋭いひとはもつと前から思つてたかもしれませんし、あのーそういう感じをもちまして(会場笑)、といひますのはあのー、わたしなんかあのー、世界視線といつたつてこれ、ローカル視線ばかりですからね(会場笑)、ほんとに(笑)。そうするとそのローカル視線からきょうのお話ちよつと横でメモをとらして聞いていたけど、これは大変な話になつてきたなあ。ただひとつわかつたことは、吉本さんが北川さんとの対談のところで菊屋のことにつて云々したときに、「中部山岳地帯では」つてな表現が確か(会場笑)『現代詩手帖』ではありまして、これ読んだとき、吉本さんは地図知らないんじゃないか(会場笑)、名古屋と豊橋とかウーンと思つてただけ、これはやつぱりランドサットの世界視線から見ると(会場笑)、さつき地図が貼つてありましたけど、ウーンなるほどこれは「中部山岳地帯」だと(会場笑)、なるほど吉本さんはここまで、もうその頃こういふ考えをピチッと、これてくられちゃうと。で、究極的にはもう菊屋つていうのはもし何か残るとしたら、中部山岳地帯の詩誌であつたということにたぶんなるだろと思つてます。えー、ぼくらの世代つていうのはちよつと全共闘世代といわれてる、まあどうしても語りますとなつかしさがあつてしまふひととたくさんいますんで、これはちよつと慎しむとして、大体親しい仲間なんかもそうですけど、大体吉本しか読まずに卒業してゆくつていうるくでもない奴が、或るいは横滑りしていつてしまつてのがたくさんいましたけど。えー、ぼくとしてはひとつ聞いて、ローカル視線というものつていうのは、吉本さんのお考へていくとこれはどういふふうになつてしまふんだらうつて、わたくしは名古屋で生まれ春井井で育つて、えー、今は日進町にい



ますけど、もうここしか(笑)知りませんので。東京も鮎川信夫さんにインタビューしに瀬尾さんで行ったときに最近では行った、そのあと一回くらい行って、よく知りませんし、あの、そうするとローカル視線っていうのはどういふふうになるのかなあ、世界視線にとつては、っていうことがちょっとお訊きしなきゃいけないんじゃないかなって気がするわけです。で、あとでぼつりぼつり訊くっていう手もあるんですけど、大体わたしは思いついたことを先に言ってしまうと、あとで笑われるより先に笑われてしまおうという心情ですので、先に質問というか、吉本さんにお答えいただければ嬉しいんですけど。あの、先ほど科学技術のお話がありまして、それから世界視線を獲得するには死後のイメージとか密教的なイメージがあるとこの言われまして、で、もうひとつ科学的なそういう視線ってこと言われましたけど、そうしますと科学技術をバックにした視線のほうが、三つある視線の中では優位なんじゃないかあるいは何かこう、そういう必然といましようか人間にとつて。そういうのあるのかな、俺は密教視線でいくんだっていうひとがいたら、それはそれでいいんじゃないかっていう気もするんですけど、ここらはどうなっちゃうのかなっていう感じがいたしまして。ちょっと理論的になつてきましたね(会場笑)。それからあの、これは講演を聞く前から考えてきたことなんですけど、世界都市ってものが

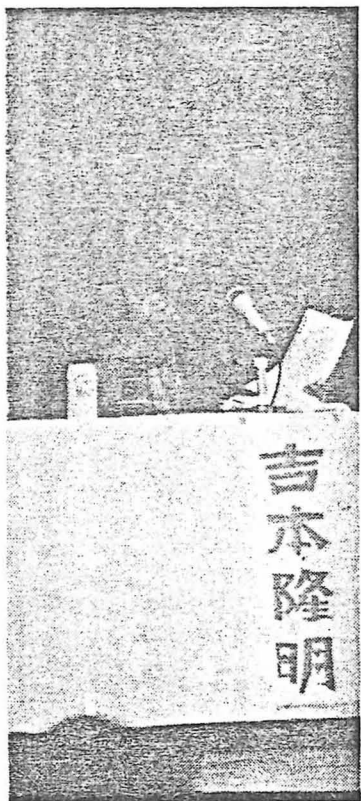
うか。あるいはもつとあなたに、どう言つたらいいんでしょう、好まれる言い方をすれば、すべてはローカルな視線だということになつてしまふんじゃないでしょうか。つまり、どこが中央でどこがそうじゃないかということじゃなくて、もう、このランドサットみたいな数十万キロでもいんですけど、もっと高い所、つまり無限遠点から見た世界視線から見れば、全部がローカルだ、それからまた全部が中央だつて言えれば中央であるというふうには、つまり、区別がそういう意味でいへばなくなつてしまふ視線じゃないかなって、ぼくはそう理解しますね。それからえーと、あの、科学技術的な視線と究極映像っていう問題でお話ししたことと関連するアレなんですけども、密教の視線というものはどちらがいいのか、あるいはどちらでもいいんじゃないかっておっしゃいましたけど、ぼくもどちらでもいいと思います。つまり好みの問題としてはどちらでもよろしいんじゃないか。それで現に、どちらが好きだつてほしいますし、どちらが嫌いだというひともいるわけです。ただ要するに、ほかのこともそうですけども、ほかの例でもそうなんですけれども、科学技術が表現した視線から密教視線を批判したり、あるいは否定したり、あるいは密教視線から科学技術的な視線を否定したりっていう否定の仕方っていうか、とり方っていうのは意味がないってふうには考えます。つまり、そういうふうにはアレすると、対比すると、原始的な生活と電化された生活とどっちがいいんだっていうような、非常に通俗的な対立の問題になつてしまつて、それは現にたくさんのお話があるんですけども、しかしぼくはそれは不毛であつて、つまり言ってみれば一種の楕円、ふたつのつまり、本来的にはひとつに重なるべきなのかもしれないけども、現在の過渡的な段階ではふたつの中心をもつていて、それが相互に円を描いて世界をつくつていて、みたいなふうで考えるのが最も妥当なように思えるっていうふうにはぼくは思います。だからどちらがいいかっていう比較の仕方自体は、好みの問題としてはどちらでも結構です、よろしいじゃないですか。つまり、俺は原発発電の世話にはならん

あるとしたら、これは、天皇は、皇居つてのがありますけど天皇つていうのはこれ、霞ヶ関のビルか何かに入っちゃうのか、これはどうなっちゃうんだろかなっていう、それを何か心配するんですけどね(会場笑)、わたくしは至つて保守的な人間ですもん、子孫に美田を残せつていふこと言ひまして瀬尾さんによくからかわれていますけど。それから、もうひとつとしては、ま、同じようなことかもしれないんですけど、特殊浴場とかそういう場所がありますね、悪場所つてのが。そういうものは世界都市にとつてその、何かを異化作用してるのか、あるいは嗜好なのか知りませんが、そういう場所つていうのはどうなのかなあと、そこをお訊きたいなと。ちょっとほくらしくないことを言つてしまつて(会場笑)、じゃ(笑)どうも。

司会 どうもありがとうございます。まあ、成田さん橋爪さんといつてからと思つたんですけど、成田さんからちょっと予想以上にあの、高度な質問がでてしまったので(会場笑)、別名「ローカル成田」っていうふうには呼ばれてるわけですけども。あの、ローカルな視線っていうのはいっただいどうなるのかということ、それから世界視線における科学性の優位が云々かんぬんとかいう話がありましたが、まあそんなとこですね。それから世界都市において皇居あるいは特殊浴場(会場笑)のあり方はどうなるかと(会場笑)。で、やっぱりちょっとこれは吉本さんにあの、ここでちょっとひとこと言つていただきたい。

吉本 わかりました。まず最初の、ローカルな視線はどうなるかってことなんですけども、これは、世界視線から見たローカルな視線つていうのは区別がつかないんじゃないでしょうか。つまりローカルであるか中央であるか、あるいは社会主義国であるか資本主義国であるか、国境がどこにあるか、なんていうのは全部区別つかないで同一視されてしまふから、それは区別つかないんじゃないでしよ

うんだつたら、中部山岳地帯に(会場笑)入つていって、そこでランプの生活をされればいいわけで、つまり個人が好みの問題としていうならばどんな生活をしてもいいわけですし、ぼくも原始生活をしてみたいなあ、一年のうちいくらかはしてみたいなあと思つたりしますから。思うと、ぼくはそうしますし、そりゃもう好みの問題としてならどうあつてもいいわけなんです。ただ現在多くやられるような、どちらかの視線からどちらかの視線を否定するみたいな、そういう対立の仕方あるいは対比の仕方は不毛であるというふうにはぼく自身は考えています。それから天皇はどうなるでしょうかということですけども、天皇つていうのは、いずれにせよ古代の数百メートル、先ほどの比喩でいへば数百メートルの丘の上から自分の統治してる直轄の村落を眺めて、ああ、民は賑わつてる、かまどは賑わつてるとか賑わつてないとかつて言つたところから発生して、まあ近代あるいは現代、まあ敗戦までそういうふうには支配つていふのを、政治制度の支配をしてたんですから、こんなものは世界視線から見たら支配被支配の意味をもたない、もたなくなつちゃう存在だと思ひます。つまり、それ以上の意味は何もないっていうふうにはぼく自身は思ひますから、それ以上どうなっちゃうんだろかなつていう御心配だつたら、やっぱり御自分で御心配なさつて(会場爆笑)、御自分で対策をたてる(会場爆笑)っていうふうにはされる以外ない



だろっていう、ぼくはそこまでは関心がないので(会場爆笑)、世界視線のひとつの理想視線からみれば何の意味もないんだって、天皇がどうなるかっていうことなんか何の意味もないんだって、いふふに、ぼくはそういうふうな理解をもっています。それからもうひとつ(笑)、特殊浴場とは(会場笑) どういうことかっていう、これはぼくは東京でいえば歌舞伎町っていうのが典型的に、(司会者のほうを向いて) そういう意味でしょうね(「そうです」)

|| 司会者 ||、は、(会場笑)、典型的にそうだと思うんです。それでぼくそういうこと喋ったことあって、喋ったら皆シーンとなっちゃって仕様がなかったんですけども、あの、歌舞伎町っていうのは大変興味深く思っています(会場笑)。つまりあの、本格的にその、何かフィールドワークで本格的にしないといけないんじゃないかっていうふうな思っている(会場笑) なんです。ただ、このフィールドワークっていうのは、言ってみれば大石内蔵助が祇園で遊んで、これは敵の目をこまかすために遊んでんだって(会場笑) いうのかね、本当にももしろいから遊んでるのか(会場笑)、つまり、どちらかっていうの区別することはできないし、どっちだっていうふうに言い張ることもできないんで、本当は本音を言えば両方だっていることに(会場笑)、まあ、大石内蔵助の場合もそうなるわけで、つまりこれはやっぱりそこを追究するとそうなるっちゃうんじゃないかかっていうふうな(会場笑) 思うから、なかなか条件が揃わないとできない(会場爆笑) っていうふうな思い……。ただ表層だけはぼく、ちょっと表層ではちょっとしたことあるんですけど、たいたことねえんです、要するに覗き部屋みたいのをしたことがあるんですけども(会場笑)、あの、それ自体は非常に興味深かったです(会場爆笑)。あの、で、何が興味深いか(笑) と申し上げますとね、つまり旧来、つまり戦前までの、あるいは戦後すぐくらいもそうあったんですけど、戦後すぐくらいの、つまり高度成長期以前の日本では、要するにその種のアレは、例えば東京で言えば吉原であるとか、うーんその何か、向島であるとかいろいろ

んじゃないかと思ってるわけです。だからたぶん様々なポーズを真ん中とってるその女性自体は、あの何ていいますか、つまりもし慣れてしまえば意識しなければ、自分は性的、何かそういう性的にいやらしいか何か知りませんけどとにかく、欲望の目でもって見られているんだってことを意識しないでそういう様々なポーズをたぶんとれるんじゃないか、慣れるととれるんじゃないかっていう、第一にそれがものすごく複雑な気がしたんです。それから覗いてるほうっていうのは、まあ学生さんみたいなひとが多かったけれども、あの、つまり覗いているほうも、何ていいますか、つまり吉原へ行ったりか鳩の街へ行ったりと違って、つまり永井荷風のいわゆる遊郭遊びですか、そういうストレートなものじゃないから、自分はその、何か悪いことをしてるって言ったらかかしくてですけど、つまりストレートな性行為をしてるっていう感じなしにたぶんすむんだ、っていうのがぼくの理解の仕方なんです。そうして、各部屋を回ってくる女のひとは別なひとなんです。それで各部屋を回って、要するに何ていいますか、あの、回ってきて要するに、いかがですか御用はいかがですかっていうふうな(会場笑) 言ってみながら回ってくるわけですけど、それは要するにあの、要するにマスターベーションの手伝いをしますよっていう意味なわけです。で、そういう女性が回ってくるわけですけど、それは真ん中でヌードでいる

所、幾つかのその何ていいますか、そういう遊郭地帯みたいなのがあって、そこで性的な遊びっていうのが行われ、また性的な商売っていうのもその一画で成立し、っていうふうになっ

ていたと思うんです。それでそれは典型的に例えば永井荷風の小説がよくそれを表現していますけれども、まあ、そうしますとそれは、行きまして覗きみっていうようなものがありますけども、覗きみであるかないかという問題は生じますけども、いずれにせよストレートな、何が眼目かかっていうことを正直に言っちゃえばそれはストレートに性的な行為が、性交行為っていうんですか、性的な行為がストレートな目的であって、それに対してお金を払い片っぱは金銭を取ってっていうそういう関係なだけども、ぼくがちょっと見ました歌舞伎町における性っていうのは、そんな単純なものじゃなかったように思います。つまり例えば覗き部屋っていうのを例に言いますと、覗き部屋の中央にヌードの女のひとがいるわけですけども、それで各人は仕切られた覗き部屋でそれを覗いてるわけですけども、そうすると中央のひとは様々なポーズをとってくれるわけです。けれどもそれは、そのひとの側から覗いてるひとが見えるかどうかっていうと、ぼくはたぶん見えない



ひとは全然違うひとなんです。だからそれでもやっぱり一種の自分はストレートな性行為をしたっていう、そのストレートさっていうのをその女性のひとも感じなくてすむし、覗いてる男のお客さんのほうもそれを感じなくてすむっていうふうになっていると思うんです。そうするとこの性のこの関係っていうのはそれだけ見たってものすごく複雑なわけなんです。複雑だとぼくは思っています。解釈したわけですか。だからぼくはウエーッと行って、やっぱり世界都市だなあと思いましたが(会場爆笑)。つまり、あの、そこでの性自体っていうのは、つまりこれはちょっと微妙だから誤解しないでほしいわけです。わざと誤解するひとは例えば、あの野郎けしからん、性を商売しているところについて肯定的な言葉を弄して、みたいなことを言うひとが必ずいるわけですけども、そういう意味じゃなくて聞いてください。つまりそのこと自体の構造を今説明してんだっていう(会場爆笑) (笑) ふうな思ってください。つまりこれは中立で、いい悪いじゃなくて説明してるんだって。そうするとね、その性の間接性っていういまいましようか、間接性が積み重なって覗き部屋っていうのはできているとぼくは理解するわけ。つまり単にそれだからそれだけのことで、旧世界における旧東京っていうものももっていた遊郭のイメージみたいなものとまるで違うんですよ。だから、まるで違うんで、やっぱりぼくはね、これはちょっと相当すごい所だな、やっぱりすごいことになってんだなあっていうのが、わずかに表層をアレした(会場笑) 段階でぼくがそういうふうな理解したわけですね。だからもつと内部に入っていくたら、もつといるんが言えるんじゃないかっていうふうにはぼくは考えますから、やっぱりこれは本当に専門家のひとで大石内蔵助になってもいいっていうふうな思ってる方がおられたら、やっぱりやって、そのレポートがあるんなら(会場笑) ぼく聞かしてほしいみたいなふうな気がぼくはします。ただぼく自身の探索っていういまいましようか、理解はそれ以上今のところ及んでないんですけども、ぼくはこれ相当複雑な、性っていうもの、人間の性っていうものの、まあ



商売っていえば商売、売買っていえば売買、あるいは産業っていえば産業なんですよけども、それはかなり複雑なことになってるなっていうのがぼくの理解で、ぼく自身はもっと奥底までつまないと本当の否定と本当の肯定ってのはできないなあ、どちらもできないなっていうのがぼくの感想理解なんです。一応これで。(会場笑)(会場拍手)

司会 すごく良かったですねえ(会場笑)。ほんと「菊屋まつり」やって良かったっていう。あのー、じゃあのー、また今度何がとびだすかわかんないという橋爪……、あ、それで、くつろいだ雰囲気いやがうえにもなってるから、いろいろあの、さつきからビールがばがば飲んだりなんかして、トイレなんか行きたい方も講師のなかにもいらっしやるかもしれませんが、あのー、適当に、まあ例えば成田さんが発言されてるときか(会場笑)、トイレでも行っていたら結構です。それじゃあのー、何がとびだすかわかんない今度は橋爪さん、お願いします。

橋爪 えーと、橋爪ですけれども、何か野暮なことを言いそうだし、なのであと回しにされたような気がします(会場笑)。きょうは初めて吉本さんにお目にかかりまして、実は非常に感激しております。大変幸せです。それから加藤さんにも竹田さんにもきょう初めてお目にかかりまして、成田さんにも、えーと、あのー、”脳歌化”とか何かそういう噂がございましたよ。それであのー、もしそういうアシだったらどうしようかなあと思っただけで(会場笑)(笑)まいましたところ、全然そういうこともなく、非常に安心しました。それでわたしは社会学なんかやってる者として、実は文学は非常に疎いのでして、こういう詩人の賑わいお祭りに座っているのは何か間違いないかと思っただけですが、ですから文学のことはさっぱりわかりませんので、というところは吉本さんのことはほとんどわかりませんので、えー、少しは読んでるんですけども

か、まあ、そういう発想をすんなりっていいものかなあというふうに思っていて、えー、つまり権力についてわりあい肯定的になってきているわけです。で、それは昔学生の頃にですね、『共同幻想論』なんかを読みまして、あるいはマルクスなんか読みまして、まあ、権力が死滅するのだからいろいろ書いてあって、わりあい真面目にとかまともなふうなふうな考えていたことから見るとだいぶ違う場所に来ているような気がするわけですけれども、えーと、きょうのお話だと少しそういうその、権力を肯定するという要素もあつたように思われるんですが、権力というのは悪いのかどうかというニュアンスをですね、ひとつ伺いたいなと。で、そこが違いますもんなんです。古いヴァージョンといいますが、ちょっと前までの吉本さんの体系というのはそういうものがひとつの柱になっていたような気がしますので、わたしの考え方とずれているといえますか、えー、そういうことです。それでですね、じゃ、権力についてはですね、どういふふうなアプローチしたらいいかっていうのは、まあいろいろ考えて難しいんですが、権力っていうのはイメージということを追いきれるのかなあというのがきょうお話を伺ってまた考えたこととして、権力っていうのはやっぱり何がしかのその、物質性ですか、こういう(こぶして机をコツコツと叩く)その、何ていうか。イメージと対極的なものっていうのがあるかもしれないんですけど、例えば食事をするっていうのはイメージの問題以上に何か或る物質性っていうのがあると。ま、古い言い方でですけどね。物質性ってこと言わなければ事実性でもないんですけど、こういうことが起こったと、こういうことは起こらなかったと。これは反対のことはイメージでできるけれども、事実っていうのがあるとするんですね、それはイメージではどうしようもないんじゃないかと。で、そういう物質性とか事実性っていう世界がイメージのほかにあるとしますとね、まあ、そういうのは非常に堆積して、我々がここにいてとかいふことを含めてですね、部厚い基底をもってるんじゃないかと。ひとつでいうと歴史ですけども、そういう歴史とか事実の堆積っていう



わかんないなと思っただけで、たぶん変なことを言いますが。うーん、まあいろいろ疑問に思っただけはあるんですけど、ひとつだけお尋ねしようと思います。何か『現代詩手帖』という雑誌でまた今度吉本さんの特集をされるとか何とかいうので、わたしのところにもお鉢がまわってきまして、それで『ハイ・イメージ論』とかいろいろ読ませていただいたんですけども、きょうお話を伺って大変おもしろく、ま、これを聞いてればあいうまじいことは書かなかったのにと(会場笑)(笑)思った部分もありましたが、まあいろいろ生意気なこと書かせていただきましたけども、あのー、権力っていうことをおっしゃいましたね。世界視線っていうことが権力視線だつて。で、視線のとり方というものが権力に非常に関係あるんじゃないかと。で、権力っていうことはとても気になっているという以上ですね、えー、まああの、わたしの考えてることのなかでは重要なことなんですけれども、で、吉本さんのお仕事にもいろいろそういうことありますんで参考させていただいてるんですけども、ひとつわからないのはですね、えー、いろいろ考えているうちにですね、わたくしは権力をちっとも悪いものとは思わなくなつてしまつたんですね。むしろ権力というのは在るものだと。この性質をよく調べてですね、使いこなすといえますか何といえますか、それを悪い、あるいは死滅すべきだとか、あるいは少なくとも

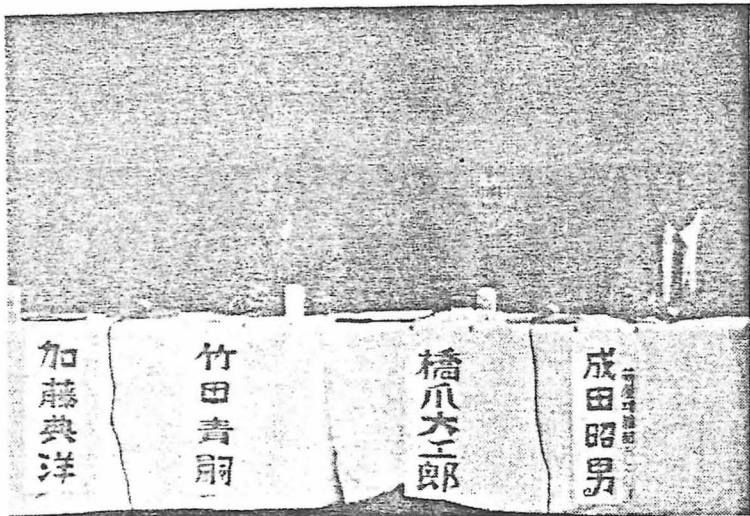
のが我々の現在をつくつてると。あるいはそのうえに、はじめて我々のイメージの世界というものも、広げることができているのではないかと。ですから、是非きちんと権力のことを考えたいな、って思った場合にも、あのー、イメージ論ってすばらしいけど、ぼくは別な方法でやりたいなというふうを感じる部分があるわけなんです。それから経済学のこと何かイメージでなるといふことで、これも非常に効果的か、あるいはユーティリティとかいろいろアプローチできるけど、そうじゃなくてイメージじゃないかと。商品価値じゃなくってね。っていうことありました。で、商品はね、確かにそうだと思うんです。もともと商品っていうのは、実際飲んだり食ったり生活に役に立つからということを使つてるんですが、消費社会化したりですね、どんどん生産のほうが高度になってくれば、何の役に立つかわからない、はつきりしないというふうなものを、いろいろな形で欲望の対象として売りこまなければいけないわけで、ま、イメージ化していくわけですけどね。しかしよく考えてみれば、商品を生み出すものというのは、えー、むしろ資本という物です。ま、資本というのは単純な商品ではなくて、えー、もっと複雑な構成をもっているわけです。で、簡単に言うと、イメージ化できなくてですね、我々の存在っていうのをむしろ含みこむような感じになっていると。で、商品っていうのをイメージ化できるとしますと、ま、我々っていうのがあって、そのイメージのなかにこういう物質性っていうの、物質じゃないと考えると商品、あ、イメージと考えるとですね、そういう世界に生きるってことはできるかもわからないけど、そうじゃないいわゆる労働といいますが資本といいますが、そういう物質や人間の配置つてもあるわけですけども、そういう論理っていうのはですね、全部イメージで解ききれるのかなあっていう気もして、そのへんも伺いたい。だからそのー、権力っていうのはイメージである以上に、そういう事実とか歴史とかファクチュアリテイのレベルの分布の問題であつてね、えー、両方ないといかん

のじゃないかなって、ちょっとだから、ま、唯物論と観念論みたいになりましてけれど、そんなことを考えました。ほかにいろいろあるけど、時間がかかるばかりですから、このあと。

司会 はいはい、どうもありがとうございました。とても明晰に質問していただいたので要約する必要もないと思いますが、だいたいまあ二点だと思えますけど。前提として権力は悪なのかっていうことと、それからすべてを統一する理論的な骨格っていうのをイメージして全部覆えるのかっていう、だいたいその二点なんだと思えますけど、よろしくお願いします。

吉本 はい。あの、橋爪さんが権力について大変本質的な問題を今だされたように思います。そして、あの、この権力についてはぼくが自分で理解してる限り、あの、橋爪さんがずつとよくやっておられるから、まあ、あんまり申し上げることもないんですけども、お答えできるかどうかは別として、少し違う経路からぼくはずつと自分がやってきましたから、少し理解の仕方が違うところからいきたいと思えます。で、まあ、初めに、ぼくは脳軟化症(会場笑)(吉本笑) っていうお話ができましたけども、最近では浅田彰なんかがよくそういうことを言うんだけど(会場笑)、ぼくはちよつと浅田彰よりぼくの方がぼけてないって(会場爆笑) いうふうにも、何ていいますか、つまりこれは増谷雄高さんと同じで、つまり、日本資本主義の繁栄っていうのは第三世界みたいなものの貧困あるいは搾取のうえに成り立っているのだから、そうじゃないっていうのは、関係ないっていうのはおかしいみたいなことを、だから吉本はおかしいことを言ってるっていうふうに言ってるわけですよ。ぼくは最近そう言ってるの見ましてね、で、とんでもねえ奴だと思ってる(会場笑)、早速何かで書いて言っときましたけどもね(会場笑)、書いてときまじただけどもね。ぼくはそうじゃないと思ってるわけ、

おける国家権力、そりゃ日本がもし進歩権力なら進歩権力でいいわけですけど、社会主義権力なら社会主義権力でいいんですけども、それに責任があつて、最後に一般大衆に責任がある、つまり責任がかかってくると思えます。つまり二つの、何ていいますか、透過膜っていいでしょうか、壁を通過しなければ、日本国における大衆の繁栄っていうものとそれから第三世界、例えばエチオピア社会主義国家権力のもとにおける民衆の飢えっていうものを、即座に對比することはできないと思えます。これは浅田彰の間違ったっていうふうにはぼくは思ってる、確信していますね。つまり、それは



経済学普遍主義みたいなひとがよく考えやすいことなんだけど、現在において経済学的範疇、つまり価値論だけじゃなくて価値論っていうようなもの、商品の価格論っていうようなものを含めていうならば、それを限ってるのは区切ってるのはやっぱり国家なんですよ、あるいは国境なんて、国境が国家の管理力が商品の価格自体の格差っていうのを限ってるので、これには二つの国家の格差が介入しています。だからぼくはそんな言い方をするのは間違いだと思えます。それは例えば、言い方を換えれば、浅田彰なら浅田彰が例えば京都大学の助手の給料をもら

吉本隆

つまり第三世界における、つまり橋爪さんへのお答えのひとつにも関わるわけですけども、つまり国家、あるいは国家・権力っていうのがあるわけですけども、これが悪であるか善であるかっていう問題を内在的にはもう少し違う説明をいたしますけれども、これを一種の世界権力としての国家権力っていうのは悪であるかどうかについては、ぼくは悪だっていうふうには、現在において悪だっていうふうには思ってるわけですよ。ですから第三世界におけるもし飢えてる貧困なひとがいたとしたら、その第一責任はその第三世界のその国家の、エチオピアならエチオピアの国家の権力第一責任があるというふうには考えています。それから第二責任はどこにあるかっていったら、日本国国家の権力を占めてる、つまり保守政府っていうものに、これは進歩権力でもかまわないんですけど、要するに日本国国家権力に第二の責任があると思えます。それでそのあげくに最後に、要するに我々日本国の大衆っていうか民衆に、もし責任があるとするならば責任があるっていうふうには考えています。ですから大衆の繁栄、日本資本主義の発展に伴う日本国における民衆の繁栄っていうものは第三世界の搾取のうえに成り立っている、っていう言い方はぼくは間違いだと思えます。つまり大ざっぱに言うときはそれはいいですけど、本当はそうじゃないのであって、要するにそれには中間、要するに第三世界における国家権力、それから日本国に

って、それで遊んでるじゃないかっていうふうには言った場合に、それは日本国民の税金をちゃんと給料でもらうってあいつは遊んでんだ、っていうのと同じなわけです。で、それは嘘ではないでしょう、つまりそれは間違いないけれども、しかしそういう言い方自体を否定することなしに、やっぱりぼくはこれからの理念っていうのは成り立たない、思想なんか成り立たないと思うんです。だからぼくは、浅田彰がそう言うのなら、そりゃお前さんは助手として国家から給料をもらっている、その国家からもらっている給料は日本国民の税金から出ると、それでお前税金をもらって勉強しないで何か遊んでるじゃないかっていう(会場笑)、そういう言われ方をしたらあなたはどお思いますか。つまりそれは嘘ではないですよ、嘘ではないとぼくは思ってますけども、しかしそんな言われ方を肯定したら間違いだし、つまり肯定したら終わりなんです、だからぼくは肯定しませんね。だからぼくは浅田彰の方がボケてると思えますね(会場笑)、ぼくはそう思えますね。だから「脳軟化症」どころじゃないんですよ(会場笑)、あの人たちはボケてるんですよ、つまり駄目なんです(会場笑)、という、ぼくはそう思ってますね。つまりいい気になっちゃ困るっていうふうには、ぼくはそう思ってますね。だからそれがひとつ「脳軟化症」に対するお答えなんです(会場爆笑)。で、これは多少アレですけどね。それから今度は、権力は悪いものじゃないんじゃないかっていう問題なんですけども、あの、ぼく、橋爪さんのお仕事っていうの全部じゃないけど目を通しておりますから、そうおっしゃる根拠っていうのもぼくなり理解の仕方をしてるわけです。そしてぼく自身も、あの、もしも、もしもですけれども、もしも国家の権力っていうものが、その国家のもとにおける民衆の内在的な構造っていうか、もたないという面からいえば、ぼくは橋爪さんの言われることに賛成なんです、っていうか、或る意味で賛成だと思ってるわけです。つまりそれを

ほくの根拠から申し上げますと、要するに現在日本の一般大衆、労働者も含めて一般大衆っていうものは、だいたい自分自身が意識のうえては、あのー何ていいますか、自分たちが中流だと思ってるひとが六十パーセントから七十パーセントいるわけなんです、統計とると。それはどういうことを意味するかっていうと、自分たちは意識としては現在の日本国家のもとにおける市民社会において、自分たちは半分以上をそこで質量ともに、つまり文化水準経済水準その他の水準で知的水準で、自分たちは半分以上占めているというふうに考えてる人たちが六十パーセントいるということの意味するわけです。そうするとこういう段階に日本の社会、あるいは世界の先進社会っていうのは現在そうですけども、そういう社会に突入しちゃってるところで権力っていうものをどういうふうに考えるかといったならば、それは必ずしも国家から下へさがってくる権力で考えて考えられるかっていったら、そんなことはないの、むしろそういう国家権力から下へさがってくるって意味あいの権力は、ほくの理解の仕方では、ただ傾向として上から下へさがってくるというくらいにしかぼくは意味をもたないだろうなっていうふうには思ってるわけです。つまり主人公自体が、大衆自体が自分を主人公だと思ってるのが六十パーセントいるわけですから、だから市民社会の上部にある国家っていうのの権力、つまりそれを抑圧した抑圧だとは



かり言ってるってことには意味が、六十パーセントがた意味がないっていうことになり、つまり理屈からいうと。ですからそこでは傾向線、傾向としては国家権力から下へさがってくる権力の傾向線があるよっていうふうなことはぼくは現在でも考えていますから、そこでは橋爪さんの言われ方に全面的に同じじゃないんですけども、ところが市民社会内部において言うならば、必ずしも権力の線は上から下へいってるとは限らないんで、いってみれば、イメージでいえば、下から上へいったり、或る場合は上から下へいったり、下から上へいったり、つまり局部的に見ますとそういうふうな上から下へいってると権力とか下から上へいってると権力とか、あるいは平行な権力で、つまり権力っていうのは意味がないっていうような部分があったりっていうふうな、非常にアトラダムに権力線っていうのを考えないと、それをちゃんと微細に極めていかないと、現在の実情に即さないんじゃないかなっていうふうなぼく自身も考えていますから、ぼくの理解の仕方です。そういうふうな理解の仕方をしていきますから、その部分では必ずしも橋爪さんの言われることと不一致ではないっていうふうな理解をしています。ただ、要するに、現在の世界における国家権力、つまり国家間権力についてもよいわけですが、これも、世界史のなかにおける国家っていうものを考えて、ぼくはこれは抑圧権力であって、社会主義であるうと資本主義であるうと両方ともこれは抑圧権力だっていうふうな思ってるから、そこでは漠然とてはありますけれども上から下の、つまり大衆抑圧として働いているひとつの傾向線を考えていうふうな考えるのがよろしいんじゃないかって、それは捨てがたくありますから橋爪さんのお考えと一致しないかというふうな思っています。それからもうひとつ一致しないかと思われることがあります。それは、ぼくは今橋爪さんの言われたような意味でいえば幻想主義者ですから、つまりすべては幻想だっていうふうな思ってる、すべては個人幻想と対幻想と共同幻想だっていうふうな思ってるわけですから、つまり国家もまた幻想なんであって共同幻想なんて、つまり幻想から現実の市民社会

に対して権力線ってのはいったい引けるものなのかどうかってことがあるわけなんです。で、これは非常に引きにくい線なんです。だからこれは、次元に屈折してる線みたいのを引くと何となくコマカしがきくんですけど、本当をいうと、幻想から現実へと線を引くことができるかっていうことは、つまり権力線を引くことができるかってことは、またそれは別に、上から下っていうのと別に、ちょっと考えなくちゃいけないことのように、それはぼく自身の自分の宿題みたいなふうな考えてるってことがあります。それが、あのー、そういうお答えにどうしてもなるんだと思います。だからある意味でよくわかりますけれども、ちょっとぼくの考え方っていうのは違うってことがいえると思えます。それから、えーと、これはそれと関連するわけだけれど、今橋爪さんが権力ってのはイメージだけでいえる、イメージでいえるのかっていうことになるわけですけども、これはぼくは、あのーどうでしょう、つまりイメージでいうことは、比喩としてそういってると意味あいにとられても、それからあのー、本当に事実に具体的にそう思ってるというふうにとられても、どちらでもかまわないわけ、そりゃ、お前が幻想主義者だ、さつき成田さんも言われてたですけど、超幻想主義者みたいに言われましたけど、そうだからだっていうふうな解釈の仕方をされてもいいわけ、それはおかしんじゃないかっていう言い方をされてもいいと思うんです。しかしこれは別の意味でいうと、橋爪さんもある意味では、つまり、法体系を考える場合に言語っていうものを基体にして考えておられるのが橋爪さんの考え方です。つまり法体系を言語ゲームとして理解されてるっていうのが橋爪さんの考え方の基本にありますから、それはやっぱり同じことがいえるんじゃないでしょうか。つまり、法律っていうのは言語かかっていうふうな言語じゃない部分、実際に具体的に肉体に加味される現実力であるっていうふうな言語自体がなる場合があるわけです。その問題は橋爪さんがかなりよく詳細に追究されておられて、ぼくは良くてはありませんが、ぼくなりに

つまりこれは、この軸を入れることで、言ってみればイメージ体といましようか、イメージのケルバーとして商品を抱えるんじゃないか、商品の問題を価値体として扱えるのと同じようにイメージ体として扱えるんじゃないかっていうのが多くの理解の仕方です。理解の仕方っていいですか、大ざっぱな考え方で、具体的にはやってみないとわからないので、うまくできるかどうかは別なはずですけど、おおよそのところはぼくはそういうふうな考えています。だから、何ていいますかね、このことは、イメージ体としての商品っていうのはちょっと考えないといけないんじゃないかなって思えるところは、例えば、名古屋と東京にある企業がいたと、それは「ハイ・イメージ論」にそういうことちょっと書いてありますけども、例えば東京と名古屋で企業が何かひとつの企業企画、生産企画みたいなのをたてるっていう場合に、それは同じ場所に、東京なら東京、名古屋なら名古屋に出張してきて、そこで会議を開いてそこで計画を決定してそれでまた東京に戻っていく、あるいは名古屋に戻っていくっていうようなことが必要だったのに対して、現在高度技術が発達して、名古屋と東京の両方にながら顔をしながら会議をすることができて、それでこちらの計画書ってのはすぐに東京の方に電送することができるっていう、そういうことができるようになってくるわけです、やろうと思えばできるわけですし、できるようななりつつあるわけですけども、そうしますと計画決定に要した労働時間っていいですか、時間っていうのに対して、ひとつだけ加味されなければならぬ時間があります。それは要するに二人なら二人、三人なら三人のひとが名古屋なら名古屋に出張して、新幹線とか飛行機に乗って出張してまた帰っていくだけの労働時間、労働価値っていうようなのは、そこでひとりてに時間が折り畳まれていいですか、そこに加味されてしまうわけなんです。三時間の会議で決定したとしても、それは三時間の労働時間ではないわけなんです、そこに三人なら三人の往復の労働時間っていうのがひとりてに入っちゃうってことになるわけです。つまりその問題は、商品の生産をイ

ユアリティの堆積であってね、エチオピアをエチオピアたらしめている。逆にそのもうひとつは日本の文化的な堆積なんだと。で、もしてすね、政治的国家をつくらなければどうなるかという、エチオピアの人々が大挙船に乗って日本にやってくる、ポトピーブルで、エチオピア語を話し、日本文化ってのはかなりごちゃごちゃになるわけですね。で、そういうのは嫌なんです、嫌っていうか、それを阻止するために人々が日本国政府をつくっているんじゃないかと、逆に考えれば、だから政治的国家っていうのはけしからんけれども、つまりエチオピアのことに責任があるけれども、逆にいうとエチオピア以外の場所は飢えていないわけで、エチオピア以外の場所が飢えていない、例えば日本が飢えていないってことに関しては功績があるわけですね。で、そういう積極的な面っていうものがいろいろあるから国家が機能しており、今国家というものがあつたから、あの、エチオピアの責任をとってすね、国家を全部解消しようっていう思想もあっていいと思うんですけども、そういうふうになっていないというのがリアリティだと思ふんですけどね。で、だから、国家がですね、例えば価格体系に責任があるかっていうふうな考えてみますと、その、ちょっとややこしくなつてアですが、リカルドの言っていることによると、価格体系って

イメージ化するってことにおおいに関係があるっていうふうにはよく自身は考えています。だからイメージとしての商品っていう問題とそういう意味あい、つまり一種の価値論の問題としても、そういう問題として考えてゆくといいことは、たぶん俺は必須なんじゃないかなあつていう、頭のなかにそれがあつて。だからそれがよくの考え方なんで、だから橋爪さんの言われたことは大変非常に、橋爪さんのやつておられる場所から非常にびたりびたりと何か要素をついておられるように思いますが、よく自身は今お話ししましたようなことを一応はお答えとして言うことができるっていうふうな考えています。これでよろしいでしょうか。(会場拍手)

司会 どうも。あんまりおもしろいので、ちょっと会場の方は待っていたら、もうひとこと橋爪さんから何かありますか。

橋爪 もう一段つっこむようなしつこい質問になりますけど、いいんですか。

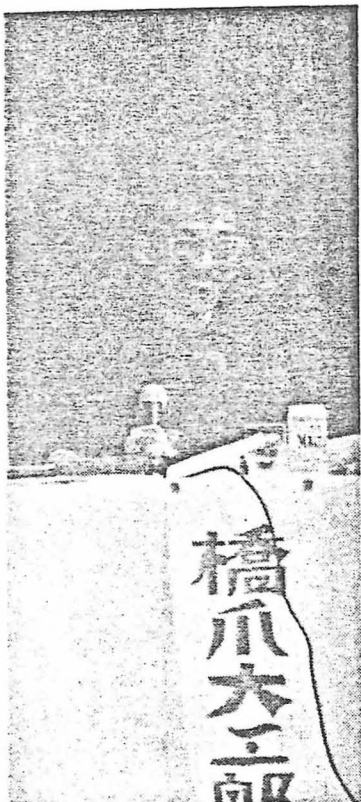
吉本 あ、どうぞどうぞ。

司会 どうぞ。(会場笑)

橋爪 根がしつこいもんですから。あの、えーと、今ある形の政治的国家が悪いんだと、で、ぼくも何ていうのかな、悪いもんだとは思ふんですけども、例えばエチオピアが何かで飢えてるひとがいると、で、それはまず第一にエチオピアの政府が悪く、次に日本の政府が悪く、第三に日本の民衆が悪いと、で、その原因の主たるものをですね、その政治的国家がつくっているから悪いのだと、こういうふうな御趣旨に聞こえたりんですけど、ぼくの理解は少し違っていますね。えーと、結局そうじゃなくてですね、そういう政治的国家をつくっているものが逆にエチオピアの生活様式という、ファク

ですけども、国際貿易のことは違ふですね。で、A国とB国で価格体系が違う理由は何かという、A国には例えば或る資源がいっぱいあると、あるいは労働者がたくさんいると、で、B国は全然自然環境とか条件が違うと、だから価格差つてのができるんだと。で、資本とかですね、人間とか労働力が移転できれば価格差がなくなるんですけども、それは無理だと、だから商品だけを移動するんだと、そうすると、価格差、利潤が生じる方向にどんどん商品が流れて国際貿易つてのは起こるんだという議論だと思ふですね。何でその資本と労働力が移転しないのかといえ、それは最大のものは文化障壁だと思ふですね。言葉が違つたりするから、労働力つて移転できないですね。で、リカルドの理論はそう読めると。そうだとすると、あの、国家なんか関係なくすね、文化的、だから、気つかないうちにエチオピア人であるひとがいると。そういうことが非常にその、関係してるとはいいかと。だからわたしは政治的国家の責任っていうのは、吉本さんがおっしゃるよりもちょっと軽いと、むしろ我々の責任が非常に重いということではないかと思ふんですけども。

司会 あの、えーと、ちょっとあの、何ていうのか、ちょっと吉本さんのお答えを待っていたら、先程の第三世界の飢餓っていうのは結局めぐりめぐって日本国民のせいっていう、ああいう議論っていうのは成り立たないっていうのは、何とていうのか、そういうふうな形での世界の像っていうか、例えば、世界っていうのを要するに世界っていうのを変えなきゃいけないんだって、世界全体がこうなつてからこれは駄目だと、で、世界全体を、世界を変えない限りはそれは駄目なんだといういい方があつたわけだけれど、そういう問題ではないんだってふうになつたときに、世界概念というか世界理念っていうか、そういうのが本当は根本的にもう世界って言葉を使ったときのその意味っていうのがもう変わらな



やいけなかったはずだと思っただけで、それで、今の橋爪さんの話とまあ重なっていくかどうか分からないけれども、竹田さんが先程も「世界の向こう側云々」っていうことを言われて、それから竹田さんの書かれるものを見てもいつも、要するに世界って括弧つきの世界っていうふうに書いてあるけど、「世界に対する欲望」っていうのをわりとまず前提として、あのー、それは否定できないっていう形で出てくるような気がするんですね。それから加藤さんがこのまえ『還相と自同律の不快』なんかで書かれていた、世界を変えるために我々は何をなすべきかっていうところからすべての議論が起こってきている、で、世界を変えるためには、っていうところをじゃどういふふうにするの、今はそのー、そういう前提自体がどう疑わなければならないかっていうことがあるような気がするわけですね。そのところを続けて、あのー、加藤さんからじゃちょっと、まあそれに直接ふれなくてもいいですけど、何かひとつこと言っていたらと……。

加藤 あのー、ちょっと竹田さん先に話してもらっていいでしょうか。ちょっとぼくどうお答えすればいいか考えがまとまらないので……

司会 あ、いいです、はいはい。

竹田 ええとですね、あのー、えー、経済学の話になって質問されたらどうしようかと思っただけなんですけど、やっぱり回ってきまして。あのー、ひとつぼくが言えるのは、さっきイメージの論のなかで物質性とか権力性みたいなものは論じられるかっていうふうなことが、まあ、橋爪さんからできて、ぼくは論じられるっていうふうに思っただけなんです。で、それはどういふことかっていうと、さっき、さっきの話にこだわりますけども、シミュレーションの世界、つまり映像としての世界、あのーゲームの世界ってそういう世界なんですけども、そういう世界のなかだけでは物質性とか権力

と。それは実存っていう契機を人間が像に対してもってるからそうなるんだ、ということになるわけです。それから、権力の問題なんですけども、そういうふうな考えが、ぼくはあのー、何ていふかな、つまり、どこに一番悪い問題があるんだ、それは国家だろか民衆だろかっていうふうな順番にちょっとならないで、もちろんそれは補助線としてぼくもそういうふうなあのーほうで考えていたりするんですけども、基本的にはそういう考え方をしないわけです。で、権力は悪であるかかっていうふうな考え方がたんでですけど、ぼくはね、権力っていうのは基本的に関係であって、えーと、えー、これもわかりにくいかもわかんないんですけども、権力っていうのはいい何かっていうふうなすーとつきつめてみると、人間がもってる幻想関係のなかで、あのー、例えばAというひととBというひとがいて、この関係はあるべき関係でないというふうな、思ったらそれが権力関係になるっていう感じなんです。例えば、お母さんと子供の赤ちゃんとのお母さんとの関係は、えー、客観的に見るとまあ一方的にお母さんが力をもっているという意味では、あのー、子供を自由に縛りつけてお前勉強しろと、こへいかなきゃ駄目だっというふうなことを言っただけで、あのー、子供を縛りつけるという点ではお母さんが権力もっているっていうことはいえる。あるいは逆に赤ちゃんからいうと、赤ちゃんは泣き声によってお母さんを縛りつけるわけですから、そういう意味で見れば、子供の方が権力もっているっていうふうな言い方ができるわけですね。けれどもぼくはそれは、あのー、例えば、あとで言った赤ちゃんとお母さんの関係っていうのは、権力関係と呼べないと思うんです。で、それはなぜかというと、お母さんのなかにも子供の意識のなかにも、本当はこういう関係じゃなきゃいけないのにこいつは俺を抑圧している、っていう意識が發生しないと、それは権力とは呼べないわけですね。単なる関係があるだけです。で、それを社会の問題に移して考えると、権力という言葉がどういふ実体としてつかまれるかっていうと、すごく単純にいうと、さっき吉本さんが



性ってのはあんまりでこないわけですね、基本的にないわけですね。で、つまり像だけだったら、現実とか幻想とかっていうものが成立しないわけですね。ところが何で人間がもってる世界像、えーとぼくはあのー、ちょっと難しいかもわかんないんですけど、基本的に観念論者なわけ、昔の言葉を使うと観念論者なわけ、全部個人のなかの世界像に世界の問題っていうのは還元できるんだっていうふうな思っただけで、その物質性とか権力性っていうのは何かっていうと、さっき言った人間が実存する、つまりあのー、死んじやったらもうゲームができないっていうふうな契機ももってる。それからそのことによつて、これができたらもう死んでもいいっていうふうな、そういう超越的な世界をもっちゃう。あのー、それがどうもゲームと人間存在の違うところじゃないか。で、その契機があるために、像が力として現われてくる、つまり権力性や物質性として現われてくる、あるいはエロス性を帯びるわけですね。つまり単に像というものを、あのー何ていふかな、えー、色彩や線分や影や陰影やそういうことだけで構成すると、像というのは物質性とか力とかエロスっていう要素をもたないんですけども、そういうあのー、人間が実存という問題をそこに抱えているために、権力、エロス、物質性っていう問題がでてくる。つまり像っていうのは人間にとって、ぼくの言い方をしますと基本的にエロスのな連関としてあ

六十パーセント七十パーセントのひとの中流意識をもつて、そうすると権力が上から下へ流れてくるっていうふうな言えなくなるっていうふうな言い方あったんですけど、ぼくもまさしくそういうふうな思っただけなんです。つまり、ひとりひとりの人間がもってる世界像のなかで、俺たちは共通してどこか非常に悪い奴に抑圧されてるんだっていうふうな像がね、構造として成立しなければ、つまり権力関係があるっていうふうな像にいないんだ、っていう言い方にぼくのつきつめ方ではなるわけですね。で、あのー、けれども、例えばひと昔前を考えればやっぱり、資本家が労働者を抑圧しているっていうふうな言われ方がね、なるほどそうだったっていうふうな実感があった、確かにこの世の中っていうのは間違っているっていうふうな、そういう言い方が多くの人間の、ま、いわば共同幻想にとつてリアルティがある。で、これは権力関係だっというふうな、人間がそういう権力があるっていう像をたててそれを直して、あるいは改編して、こうっていうふうな、そういう根拠ももってるんだっていうふうな思っただけです。ですから権力関係っていうのは、初めの話に戻しますと、つまり全部個人の頭のなかの世界像に還元するっていうのは非常に乱暴な考え方じゃないか、っていうふうないろいろ言われるんですけども、そうじゃなくて、人間っていうものがあるんなら思想をたてて世界像というものを持って、そこで客観的な関係を見いださうとするんですけども、その客観的な関係性というものを創りだす一番の根拠になつてくるのは、本当は個人、何ていうの、その世界像の内側にそういう分節っていうのは全部でくる、で、そこで権力って言い方や階級って言い方が本当であるかどうかっていうことの、何ていふかな、基盤がある。つまり現実そのもののなかで階級があるか、あるいは権力があるかっていう問い方は、まあ、しなくないわけですね。ぼくの言い方っていうと、それはしても問えない。吉本さんがよく、「大衆の原像」っていう概念で、平均的な人間の生きてる意識っていうものを探らなけいけいってふうな言い方をされますけども、ぼくのなかではつまりその問題

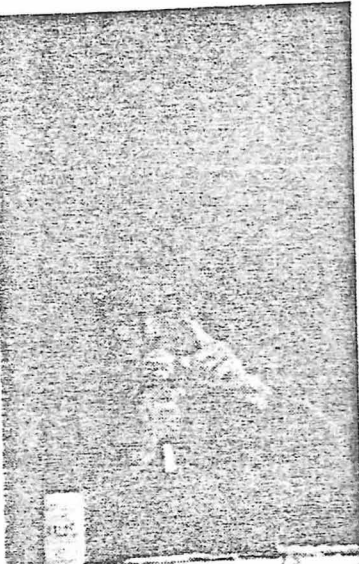
つていうのは、ごく普通のひとがこの社会つていうものをどういふふうに見て感じ受けていて、で、そのなかで自分の生きるという生き難く思っているかどうか、つまりそういう問題に全部還元できるんだ。で、えーと、ぼくがさっき吉本さんの世界線つていうふうな言い方つてのを、あのー、つまりその問題を全部世界線に還元してゆくと、ちょっと突飛になりますけども、あのー、二ヒリズムみたいな問題がでてくるわけですよ。で、あのー、これも簡単にひとことでは言えないんですけども、あのー、つまり、現実つてのは何もなくて、みんな人間の世界線の内側の問題だつていふうなことを、少しづつ人間が身にしみて感じてくると、必ず二ヒリズムみたいなのがでてくるわけですよ。で、それが何かは新しい世界線のなかで、つまり六十年代以後つていうのはそういう実感が普通の人々のなかにも入ってきたつていうのは大きいことだと思わんすけども、あのー、ひとつの大きな問題である。例えばぼくなんかは個人の頭の世界、世界線の問題に全部問題を還元しちゃえばいいんだつていうふうな思っているんですけども、吉本さんは、逆にとつていうか、あのー、世界をどうとらえるかつていうことの究極像つていうか、或る極限まで押し進めた形でそれをつかんでやろうつていふうな方をされて、ぼくはそれには大きな根拠があるなつていふふうな自分なりに思つて、つまりそれはそういう二ヒリズムみたいなものどういふふうに対抗してゆかつかつていふふうな場面、たぶん世界線、究極の世界線つていふふうな、究極の世界線つていふふうなものをつくつていくつてことは、やっぱり非常に課題なんじゃないだろうか。もしそれを失えば、たぶんこれからますます高度社会のなかで人間が、いつか現実像がどこにあるか現実というものがどこにあるんだかわかんないつていふふうな状態が進化していったときに、要するに全部幻想なんだ、全部個人のなかの世界線なんだというふうな言った場合に起こってくる二ヒリズムの問題が避けられないんじゃないだろうか、つていふふうなことをぼくは考えてるんです。で、従つて、ぼくはあんまり権力の根源

が日本にあるか第三世界にあるかつていふふうな感じや発想はあまりもたなくて、直接さっきのことには触れられないんですけども、ま、大体そんなような考え方をしてるんです。

司会 はい、どうも。えーと、あのー、本来時間は六時までつていふふうな予告してあつて、それ以後用事があつて困るつていふうなひともあるかもしれないですけど、あのー、何ていうんか、ちょっとやめる気が全然ないもんで(会場笑)、やっぱり今話しておかないと、ちょっともうこれは話せないんじゃないかつていふようなことがだんだん出てきてるとたぶん思うので、あのー、もうお客さんひとりもいなくなつてもぼくだけでもやるうつて感じがあるので、あのー、断固やるうと思つてますので、御協力をお願いいたします。(会場拍手)じゃ、加藤さん、ひとことお願いします。

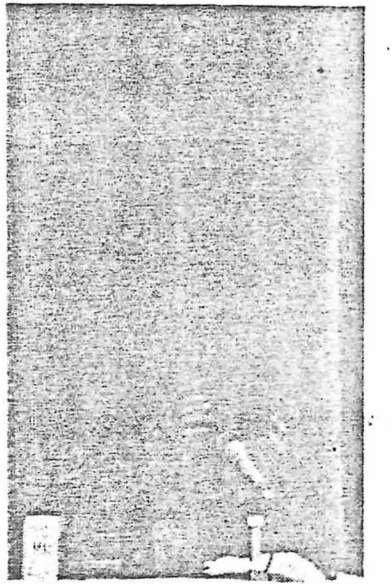
加藤 えーと、あんまりぼくそんな明晰な話できないんですけども、橋爪さんの話はぼくはおもしろいですね、おもしろく聞きました。それで橋爪さん二回目に説明したときに、悪いのは実は我々なんじゃないかつて言つたので、そういうふうな説明の仕方をしたので、橋爪さんがだしたその「権力つていふのは本当に悪なのか」つていう問題がちよつと狭いところにね、入っちゃつた。で、本当はもつとね、そんなこと言いたくなかつたんだらうなあつて思うんですけど(橋爪うなずく)。そう言わないとね、なかなかちよつとわかつてもらえないかなつて気持ちもあつて、そういう表現ができた。で、そう言わないほうがかえつてわかりやすいかもしれないあんなてふうにして、ぼくは聞きました。それで、確かにあのー、どこがそんな感想を強いたかつていうと、やっぱり橋爪さんの話がおもしろいと思つたのは、橋爪さんの考えをひとつの生体として見ると、何か欠けてるんですけど、あのー、びつたりいってないんですけど、何か欠けたまま、今ただ、とにかく権力つていふのが悪つていふふうな言われて、それがどうも本当にそうなのかなあつていふこと

を考えたひとは、あんまりいなかったし、特にぼくららの年代からね、こういう問いがでてきたつていふのは、あのーほんと、おもしろいと思う。ぼくも高校の頃は吉本隆明なんて名前も知らなかつたんですけどね、大学に入つたらみんなが「言語美」「言語美」なんて言つて、何のことかわかんなくなつたんですけども、だいぶ奥手で三年か四年たつてから(笑)いろいろ読み始めて、みんなあまり吉本さんのこと言わなくなつた頃(笑)、吉本さんの「言語にとつて美とはなにか」なんていうのを大学なんか出たあと何べんも読んだんですけど、あのー、そういう年代つて、だいたい権力つていふふうな語感でね、どういふところで、あのー非常に語感をもつてるんですけどね、語られるかつていふのがしみこんじゃつていふわけですね。そういうひとのなから、それを問い直すひとがでてきたという話を、橋爪さんの話ですけど、前に瀬尾さんに聞いたときにもね、一瞬ちよつとぎよつとしたんですけども、今もう一度つていふ形つて話を聞いて非常におもしろいですね。おもしろいつていふのは、あのー、落としませがつてない考えがここにあるつていふところで、ぼくはおもしろいなあと思つて、で、そのこととあんまり関係ないんですけども、ぼくも二ヶ月くらい前に吉本さんの考えについて、あのー、だいぶ吉本さんに影響受けてつてすね、一番影響受けてた考え方つていふのは恐らくぼくにとつては「還相」



加藤 由

つていふ考え方だつたかもしれないので、ずーつと考えていってその考え方をひっくり返したときにどんな問題がでてくるのかなつていふふうな、ま、それは吉本さんの問題ではなくてぼくの問題なんですけども。そんなところから何かこの間ぼくも、ぼくのつもりでは全然批判ではないですけども、とにかくこういうところはどうかなんだろうつていふ問題を提示したんですけども、あのー、そのね、心理的なつていふか、そのきつかけつていふのは単純なんです。吉本さんのものをずうつと読んでいくとね、ここに何かがある、ここを勉強したほうがいいつていふか、ここに何かがあるから、これは何だろうつて思つちゃうんですけど、ぼくはそういうのが自分で嫌なんです。あのー、だからそれはさっきの瀬尾さんの発言につなげると、あのー、あと竹田さんの言葉でいうと「世界に対する欲望」つていふふうなことになるかもしれないんですけども。あのー、ぼくきょうもろくなこと言つてないんですけども、何かこう意味のあることをね、頑張つて一応少し考えてきたら、その何かアースにぬけてしまったんですけど、名古屋駅に着くまでに(笑)。あのー、ぬけてしまつて何もありません。あのー、こう、自分で何かをこう訊きたい質問したいつていふふうにして、あのー、考えるじゃなくてね、つきあうような回路を何かこう、考える回路といつてもいいんですけどね、もちたい。特に吉本さんのような方とはつていふ、どうしたらムダ話ができるかなと考えちゃう。で、きょうのね、お話でだから一応批判めいたことを言うつてると、それは先程権力視線、権力の線ですね、という話になるでしょうね。これはほんとにぼくもお話を聞いて『ハイ・イメージ論』でそんなに強く感じなかつたものですか、あのー、ちよつとぎよつとして、ここに吉本さんが今話されてるこのひとつの力点があるつていふふうな聞いたんですけども、何ていうんでしょうね、あのー、つまり、究極映像、世界視線というものに対する、で、どこにさっきの橋爪さんの話つていふと、その、何か塗り残した場所が置かれてるのかな



吉本 啓

あつていうふうなことで感じて、ぼくは何となくそういうところに自分を含めてですけどね、かなり考えるべきことがあるのかなつていう感じています。橋爪さんが悪いのは実は我々じゃないかと言われたのと似た感じで、権力の話をもう少し塗り残して考えておいてもらったほうが何かこちらの受けとるものが幅広く大きい、ということなんですけども。

司会 じゃ、ちょっと間があいてしまつて恐縮ですけど、吉本さんそれじゃちょっと今の。

吉本 は、いや今加藤さんの話をお聞きしててね、やつぱり、どう言つたらいいんでしょうね、あのー、うーん、いや、その、いやきつとそうなるから真面目じゃない話(笑)したかつたなあと思つても(笑)、初めから思つたんだけど。何か要するに、大事なもんだけども、何ていいますかね、こう、するつと入つてきちゃうもんだが、大事なんだけれど意識にのぼらない議論にのぼらないみたいなことになつていっちゃうことに対する戒めを、加藤さんが今言われていたつていうふうには、ぼくはそういうふうには理解したんで、あーそんなんだよなあつていう感じをもちましたから、少し柔かく、柔かくつていうか、その、橋爪さんの言われたことアジなんですけ

いんじゃないですかつていうふうには思いますから、そういうところでは何か言いたくないような気がするんだけど、基本的に、あのー何ていいますか、例えばバタイユなんかがいうように、ここに飢えている地域の民衆がいて、ここに過剰な生産物、商品を持っていてる地域があつたとしたら、それは飢えているところに無償で、その、或るー、今ていえば国家が主導して、それを無償で提供しちゃうつていうふうなやり方つてのが一番いいんだつていう考え方が、バタイユみたいなものになりますけども、ぼくはそれは基本的にそんなんじゃないかなつていうふうには思っています。それはそんな極端な論理をしなくても、結局は国家つていうものの融通力つていいますか、管理力つていうものの障害つていうのが、飢えさせているものと飢えさせていないものとを、地球上の地域に発生させてる第一責任つていうのはそこじゃないかつていうふうには思っています。これは日本資本主義が繁栄しているのと、エチオピアとかそういう経済繁栄力つていいますか、経済力つていうのが責任なんだと考えるよりぼくは、国家の存在つていうもの、あるいは国家が国境を区切つていてるつていう、そういうことでの管理力の存在、あるいは軍事力管理力つても含めて、そういうものの存在が第一障害なんだつて考えを、ぼくは棄てない棄てられないですね、そこは橋爪さんの言われることとまるで違つていうふうには思っています。そのほかのことはぼくは、橋爪さんがそういうふうには言われるならそれでもいいですよつていうくらいの問題で、あんまりそれは熱くない論理のような気がするんです。でも最初のアレはものすごく適格に橋爪さん自身のお仕事と、それから考え方と、業績つていいますか、そのうえに立つて非常に適格に言われたつていうふうには思いましたですけども、二回目のはちょっとぼくはそれはほしくないなつていうふうな気がぼくはしましたんですけどもね。

どね、ぼく、橋爪さんが二回目に言われたことはね、どう言つたらいいんでしょうね、あのー、内容が危険つていうんじゃないかと、知識として危険なような気がするんです。つまり知識として危険つていうのは、つまり、よく熟していないことを言われているような気がするから、その段階での議論つていうのはあんまりアレしても仕様がなないんじゃないか(笑)つていうのが、ぼくの感想です。それだけども、基本的なことだからぼくはアレすべいいので、あの、大衆が国家を決定してるか、国家が大衆を決定してるか、国家は全面的にそんなに悪なのかどうかつていうようなことについては、あんまり橋爪さんの言われたことに異論はないつていうか、感想はないといましようかね、あのー、それはそういうことはどう考えてもいいですよつていう感じがするんです。ただ、ひとつだけ、ぼくはやつぱり国家つて、つまり橋爪さんは例えば国家が抑止力としてなれば、例えば世界のどこかの民衆が飢えないところに行こうつていうんで集まつてきちゃうのは、過剰に集まつてきたりしたら困るつていうようなことを阻止できないじゃないかとおっしゃるけど、ぼくは逆に考えて、国家があるから、つまりあのー、極端なことつていうと国家があるから、抑止してるから、例えばここに移動すれば均質に飢えないはずなのに、そこへ行くことができないとこつてふうになつてるのはやつぱり国家があるからだと思つてるから、究極的には、そういう意味ではやつぱり悪だと思つています。だから、これは社会主義国であるつと資本主義国であるつと、社会主義国は建前としては国家はあつてはいけないんですけども、しかし現実には国家を固執してるわけですから、これも含めてやつぱりこれはないほうがいいんだ、両方とも悪なんだつてふうにはぼくは思つてます。だからそういう意味あいては、別に資源がないから飢えて資源があるから飢えないのであるとか、価格構成が違うんだつていうような論議は、ちょっとぼくはやめてほしいつていいますか、それはあまりに熟していない論議で、あのー、ちょっとそれはその段階ではあまり論議にならないんじゃないですかつて、えーそのー、ならな

司会 はい、どうもありがとうございます。えーと、まあ時間のことばあまり言いたくないけど、だいぶおしてきてるもんで、やつぱり会場からちょっと訊いたほうがいいかなと思つて、ほんとにひとことずつ感じていきますけど、あのー何かこれだけはつていう方がいらつしやったら、手を上げていただければ、マイク持つて走りますんで、どなたかいらつしやいますか。ま、ちょっと、しんとしちゃつたりなんかして。それじゃちょっと、何人かの方がほんとは来てらつしやるつていうのわかつてるもんで、勝手にですけど指名させていただきます。

あ、きょうわざわざ横浜から来ていただいてまして、『試行』なんかで『大宰治の場所』とか『ヨリ記註解』とか連載してらつしやつて、今、家族論、教育論なんかしているりするすこたくさん書いてらつしやる小浜逸郎さん、すいませんけどひとこと。

小浜 座つていいですか。

司会 はい、いいです。

小浜 立つとあがつちゃうもんで、ちょっと。えーと、突然指名されて、実は数日来、歯が痛くて仕様がなくて、まともな頭が働いてな



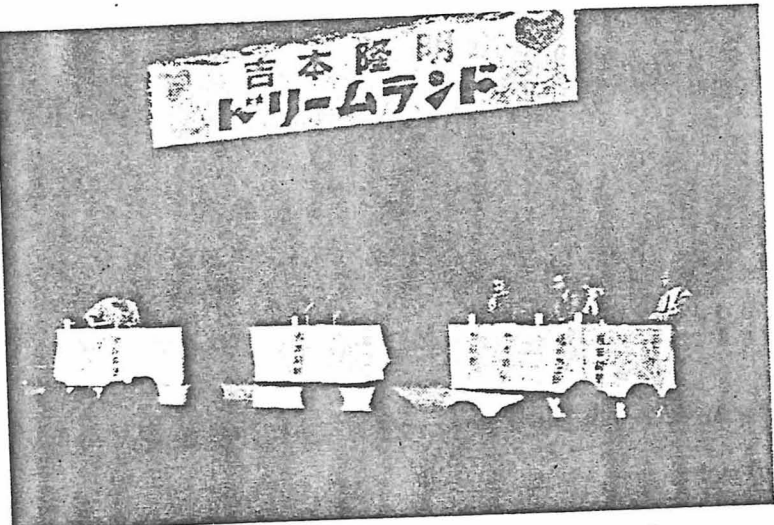
いって、言うことが支離滅裂になっちゃうと思うんですけども。えーと、今の論議をずうっと聞いて、それぞれの方がそれぞれの立場でね、頑固に自分のアレっていうのを貫いているって、て、ぼくにはぼくの考えがあるぞっていうことあるんだけど、それまた言うて、よけい何かこう大変になって滅茶苦茶になっちゃうと思うんで、あのー、きょう吉本さんのお話のテーマが「イメージとしての世界都市」ってことなんで、都市っていうことを俺はどういうふうに意識化してるだろうかって考えてたんですけど、あのー、ぼくは横浜生まれの横浜育ちで、そういう意味では純粋の都会っ子っていうことで、俺が都市なんだみたいな感じ持ってるわけですね。て、それはあのー、どういふことかかっていいますと、農村っていうもののリアリティっていうの全然わからないので、逆に自分にとって都市とは何かかって今度明確にイメージ湧かないっていうか、対象化できないってことがあると思います。て、あの、まあ、ちょっと話が自分のことになりまして、横浜っていう街は、まあ港ヨコハマとか言われて、全国的に少し開明的なイメージっていうの与えているような気がするんだけど、少くとも名古屋よりはいいイメージじゃないかなっていう感じ(笑)がしてるんですけど、あのー、実際に生まれ育った土地の横浜っていうのは、そういう港ヨコハマ、西欧に対して例えば窓になって玄関口になっているからいいイメージなんだろうってことではなくて、その実体というのは大変複雑なところなわけですね。て、それは、大体どういふことがあるかという、二つくらいあると思うんですけども、ひとつは名古屋のようにダットと広がった平野ではなくて、大塚に山坂の多いてこぼこてこぼこした街で、繁華街っていうのがのんびりだらりと広がるような、自然に都市が広がっていくような感じがなくて、うところがひとつあるということが言えると思います。それからもうひとつ、京浜東北線という電車が横浜のちょうど中心街のところを走っています、その、何ていいますか、大変象徴的なんですけれども、東京のほうから京浜東北線に向かってきますと、左側を見

てますと、いわゆるあのー、官庁街がバツと並んできれいな街なんです。て、それは街並運動なんだろうがあつて、建築家協会賞だったか建築学会賞だったか忘れちゃったけど、そういうのいたたり何かして、港ヨコハマの玄関口っていうイメージ、表向きのイメージでどんどんだしてるわけですけども、ちょっと右側に座って右側の窓を見ますと、寿町のドヤ街という有名な、東京でいえば山谷みたいなのがダットと広がってまして、その何ていうか、落差みたいなものはほんの鉄道ひとつ隔ってただけでガクッと違うっていうようなことあって、それはあのー、さっき吉本さんのお話のなかにあつた、都市は異化作用を喚起するものがあるってことがこれからの世界都市っていうものの必要条件だ、みたいなお話あつたんですけども、そういう意味でいうと横浜っていうのは複雑さっていうものをものすごく内包していて、無秩序で滅茶苦茶なところがあつて、それは名古屋のように戦後都市計画をやつてバツと造つた都市っていうのとかかなり違うところがある。そういう意味ではむしろ何ていいますか、あのー、そういう意味で開明的だつていうか、そういう異化作用を喚起するものっていうのは、俺の子供のときから横浜っていうのはあつたんだなっていうの考えてたんですけど、それであのー、それに関連して、いえ、関連してないんですけども(笑)、あのー、ちょっとぼくは食いつめかけたことあつて、大学があつた、建築をたもんでから、友だちで都市計画の事務所やつてる男がいたもんで、そこそこここに泣きついて一年ばかり手伝わせてもらつたことがあるんですけど、そこであのー、何をしたかといふと結局まあ、お役所から発注されたいわゆる都市計画の図案みたいなものを書くわけですけど、それをどういふふうにするかといふと、大体スケールが五万分の一とか十万分の一、せいぜい微視的になつても三十分の一ぐらいの、そういう大きなスケールでもつてラチスをかけるわけですよ、それで地図の上にトレーシングペーパーを何枚も重ねまして、それであいつる土地はどこかかって、土地利用の度合、人家の密集してる度合っていうのを、だんだんだんだん

しぼりだして、こはあいてると、て、これは法的規制もないから、じゃここを土地利用の対象として考えようじゃないかみたいなことやるんだけど、何しろスケールがそういう十万分の一とか何とかですから、ちょっとトレーシングペーパーがずれちゃつて文鎮が動いちゃつたり何かすると、もう全然、十キロくらい違う(笑)土地を対象にしちゃうというふうなことがあつて、あのー、こんなやり方でやつて何か人間の生活の現実なんかつかめんじゃないかって、ぼくすこくその友だちにくつてかかつたわけですね。て、それは別にそんな権力的な奴じゃなかったから、ぼそぼそね、うんそ

うなだけで生活のために仕様がねえんだみたいなこと(笑)、て、ぼく仕事やらないでそういうくつてかかつたり何かしたもんだから、そこまあ首になつたっていうか、やめる羽目になつたわけ(笑)ですけれど、そのときに考えたそういうラチスのかけ方っていうのは、きょうの吉本さんの話にあつた権力っていうものの置き方っていうか、人間の生活のなかのどのレベルに綱をかけるのかっていう意味あつて、たぶん共通するんじゃないか。て、ぼくが何だかわからないけども怒りを感じたっていうのは、そ

ういふかけ方っていうのは非常に中途半端じゃないかかっていふふうな思いました。て、中途半端だつたらどうするんだつていふ、あのー、例えば住民運動やつて都市計画を修正させればいふか、うと、そういうことやつたつて中途半端なのは目に見えてるわけ、やつぱりそうじゃないだろうというふうな思っています。ぼくの場合は何といふと、自分の身の回りの世界、あるいは家族であるとか子供であるとか、そういうところの非常に微視的なところっていうのが気にかかるわけですから、そういう方向へやつぱり自然っていうのを集中していかなきゃいけないんじゃないかかっていふふうな発想で、いろいろまあ多少考えたりして来たんですけども、それと、吉本さんのきょう言われた究極までつてつていふ考え方っていうのもつていふことによつて無化しちゃうつていふ考え方っていうのは、反転させればもしかすると同じことなのかもしれないあつていふふうな、まあ、勝手に考えています。えーと、あとそれから、権力は悪かどうかってことなんですけども、あのー、権力は悪であるつていふテーマを実践課題とか何とかがつていふところに第一義にたつてしまつていふ、一種の宗教的な置き方みたいなものが問題なつてあつて、それはどういふことかという例えはぼくの関わりてきたことではないかと、ま、ちょっと柄にもなく教育論みたいなのをちょっと書いたんですけども、例えば教育制度というのがある、それは確かにそのとおりなんですけども、学校に通つてきている子供たちのなかに何かいふような問題が起きてきた、校内暴力やつたり登校拒否やつたりする。て、それは権力が悪いからだ、制度が悪いからだつていふふうな規定してしまつて、大変何か現在起こつてきている問題みたいなものを、現象の本質みたいなものを逸してしまつていふやないか、つていふ問題意識があつて、あのー、ちょっとそういうことを書いたわけですけども、それは例えば学校の問題みたいなものは、古い権力の枠とか制度みたいなものがそういう作用を、例えば登校拒否とか校内暴力つてことを一義的に生みだしてつていふことじゃな

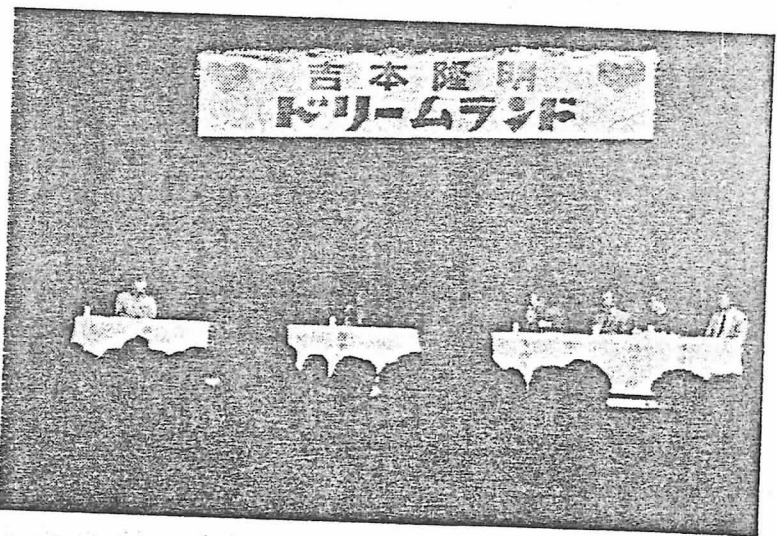


くて、もっとそれは現代的な、ちよつとそういう古い権力の枠みた
いなことじゃ考えられない現象なんだって、そこに目を据えなきゃ
いけないんだっていうふうな感じでやってきたので、そういうこと
も含めまして、あんまり権力は悪か善かっていうような単純な論議
でエネルギーを費さないほうがいいんじゃないかっていうふうな感
想を、ちよつと持ちました。以上です、どうも長々と。

司会 もうひとり、じゃ、これ最後になると思いますが、やつぱ
り菊屋まつりだということもあるし、菊屋の背後霊っていうわけ
もないけど、北川透さんにひとことお願いします。

北川 あ、どうも、きょうは発言しない予定だった(笑)んですけ
ど、最後ということで、えー、アレなんですけども。えーと、もう
随分いろんな問題がだされてきて、改めて言うまでもないと思うん
ですけども、あのー、ひとつだけ問題をしぼって、吉本さんにお答
えただいて終われるようになったらいいと思うんですけども。あ
のー、ひとつはドリームランドということと関係があまりまして、
「ドリームランド」というきょうのこれはテーマでもなければ、これ
は何なんだろうか、実はテーマは「イメージの世界都市」という
ことだったんですけど、吉本さんのところへはくと瀬尾くんとそれ
から荒尾さんと行きて、その帰りに、どうも「イメージの世界
都市」というだけではひとつ何かはつきりしないというので、いろ
いろ「吉本隆明・夢の島」とか「吉本隆明・楽しさいっぱい」とか
(笑)、何かあのー、「吉本隆明ユートピア」とかいろいろ考えて
きてこれ全部駄目だと、で、何かあるんだらうかというところで瀬
尾くんの頭に突然ひらめきまして、「ドリームランド」という言葉
がでてきて、これいいこうと、今年の菊屋まつりは「吉本隆明ド
リームランド」ということになっていうことになったんですけども、
で、先程ずっと吉本さんのお話聞いてて、ドリームランドということの
条件というようなこととていろいろ言われて、何かそれ聞いてては

はなくて、発想を逆転すれば、例えばさっきの世界都市のアレでも
そうですけども、都市がどんどん膨張していくと、ぼくら
はそこに廃墟が生まれるんじゃないかというふうな或る種の恐怖感
というか、そういう終末的なイメージを描くんですけども、そのなか
に自然を包括してしまえば、都市が自然を包括してしまえば、それ
はドリームランドに転化する。そういう恐らく吉本さんの考え方が
でてきてると思うんですけども、で、ちよつとこの前、ちよつとてだ
いぶ前なんですけども(笑)、吉本さんの「重層的な非決定」とい
うのを読んでいたときに、ミシェル・フーコーの追悼の短い文章が
ありまして、そのなかでこういうこと、正確じゃないんですけど、
言ってみえたんですね。「ミシェル・フーコーは、世界を変えるた
め」というマルクスの発想っていうのは、——あ、正確じゃないん
ですけども——十八世紀の古い安全な思想であってそれは破壊して
いいんだ、とフーコーは言っている。そのことに私は非常に強く衝
撃を受けた」というふうな吉本さんのおっしゃってみえたと思うん
ですけど、おっしゃってというか書いてみえたと思うんですけども、
結局まあそのことでドリームランドとも関係するんですけども、世界
を変えるという発想はずっと今まで我々長い間、えーと何ていうの
か、あのー、我々の発想そのものを占領してきたんですけども、そ
れを、結局そういう考え方っていうのを破壊するというに究極



くなんかはずごく解放感で
いいですか、自分の欲望が
解放されるような感じがし
たんですけども。結局あの
ー、要するにぼくらがどれ
だけ自分の欲望や感覚を解
放できるか、あるいは生き
生きとして生きていけるか
というように、物事
は尽きるような気がするん
です。それであのー、今
までの世界像っていうか世
界観っていうのはそれでな
くって、何か考えたりする
ということがどんどん自分
の首を締めつけていくよう
な、はつきりいえば世界が
終わりになるような、えー
と、どんどんどんどん都市
が膨張していつて、そして
自然を破壊し、そういうふ
うになっていったら、都市の廃墟というものが未来の世界ではな
いかとか、あるいは科学技術がどんどん膨張していつて、そ
してそれが核兵器の競争みたくなってきて、それで最終的には世
界終末戦争が起こって人間っていうのは滅びるんじゃないかと。何
かぼくらが今までの考え方で世界を変えようとする、そうすると
何か自分の命を投げだしてそれをしなければいけないとか、ある
いは世界が終わってしまう予感に苦しめられるとか、そういうところ
に今の考え方という古い考え方がきてるというふうな思っんです
ね。それで、吉本さんが今だされているのはたぶんそういうことで

的にはなるんだ、というふうな理解していいんでしょうか、という
ことです。

司会 あ、どうもありがとうございます。えーと、ぼくも先程ち
よつとそれに似た質問をしかけたんですけど、世界を変えるって
いうこと、そういう問題のたて方自体が問われているのではないか、と
いうことなんですけども、いかがでしょうか。

吉本 うん、あのー、こうじゃないですか。例えばマルクスが世界
は理解したり解釈したりするもんじゃなくて変えるもんなんだ、つ
ていうふうな言ったときに、どういう考え方の基盤にたっていたか
っていうと、やつぱりあの、ぼくは自然主義だと思っんです。つま
りあのー、つまり人間の文明社会、あるいは資本主義社会までい
った文明社会っていうふうな、つまり歴史っていうのは、いずれにせ
よ自然史の延長として理解できるので理解してるので、つまりその
延長上で農村と都市っていうのが大分裂をきたしているっていう、
そういう現状でどう変えるかっていうことが問題なんだっていうふ
うに言われているその考え方の基盤は、ぼくはそういう自然史として
の文明社会とか資本主義社会ということが基盤にあつたと思っ
けれども、ぼくが、今おっしゃったような北川さんが言うような意
味あいて、あのー、言われているような問題でいえば、自然史の延
長としての資本主義社会っていうか、人類社会あるいは文
明っていういまいましようか、その概念自体をまず変えるっていう問題が
てきたんじゃないかっていうのが、それを変えるって問題、その
考え方を考えるって問題なしには、世界を変えるかどうか
いうようなことはどこからも始まらないっていうことが、今一番問
題なんじゃないかっていうふうな、基本的にはそう考えられているわけて
すかね。

司会 わかりました。えーと、あのー、それじゃ、えー、そろそろ



菊屋まつり '86 吉本隆明ドリームランド
1986年10月19日 PM2:30 - 7:30
名古屋今池ガスビル・ガスホール
入場料(前売り)1,800円(当日)2,000円
入場者数435(会場定員356)

スタッフ

企画菊屋まつり実行おじさんおばさん連合会
演出キクヤフェスティバルディレクターアソシエーション
アートディレクター杉浦イッコウ
ポスターまんが山田裕彦
照明白井さんのお兄さん
DJ宋敏鎬
ウグイス嬢みさきたまゑ
写真田代田・福住展人・山田裕彦
受付・チケット販売加藤恵子・鮎谷恵子・半谷摩利子・
鈴木真理子
群衆整理角谷道仁
本の販売名古屋ウニタ書店
会計・二次会担当白井秀和
接待北川透・岡田啓・荒尾信子・松谷慶子
各地区元締め岡田啓(岐阜・三重)角谷道仁(西三河)
北川透(東三河)板倉道子(首都方面)成田昭男(尾張)

吉本 あの、ぼくはもういいんですけど、やっぱり半分は井上ひさし

司会 ては吉本さん、最後にひとことふたことお願いします。

加藤 何か言いたいこと全然言わなかった(笑)(会場笑) ような気がしてますけども、あのー、要するにあのー、ぼくは自分のなかにあるひねくれた気持ちっていうのがあってですね、それがあのー、今吉本さんがやっているのがおもしろいって最初に言いましたけども、ひねくれたものっていうのの意味を今取りだそうとされてるようにも見えて、そこは非常におもしろいってことなんです、それだけです。(会場拍手)

司会 じゃ、加藤さん。

竹田 ぼく言いたいこと全部言っちゃったんで、早く煙草が吸いたい。(会場笑十拍手)

司会 竹田さん。

橋爪 未熟なのは確かですけど、未熟であることを恐れている仕様がなくて、えー、まあ、頑張ります。(会場拍手)

司会 ては橋爪さん、どうぞ。

成田 あのー、カラオケの会場はどこでしょうか。(会場笑)

エンディングという感じですけれども、もうほんと時間が大幅に上まわっているんで、締めくくりにほんとひとことずつ、ちょっとひとことずつ感想を述べていただいて終わりにしたいと思ってますので、成田さんからひとことずつお願いします。

しの離婚問題っていうの(会場笑十拍手) やりたかったという感じが半分はあります、っていうのがぼくの感想です。

司会 あのー、そうですね、菊屋がちょっと大問題を取り上げすぎ、たというところがありますけれども、あのー、まあ、次の機会に井上ひさしの、もうちょっとだけ(笑) 時代遅れになってしまいが、えーそういうわけで、もうほんとに長い時間、会場の皆さんもお疲れになったと思いますので、このへんでお開きにしたいと思います。会場の皆さんもありがとうございました。ゲストの皆さん、吉本さんどうもありがとうございました。拍手で……(会場拍手)

〔講演及びフリートークに関する記録上の責任は、筆者(荒尾信子)と編集部にあります。〕